

平成 27 年度 京都市埋藏文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書
平安京左京二条二坊「冷然（泉）院」出土品



2016

京都市文化市民局

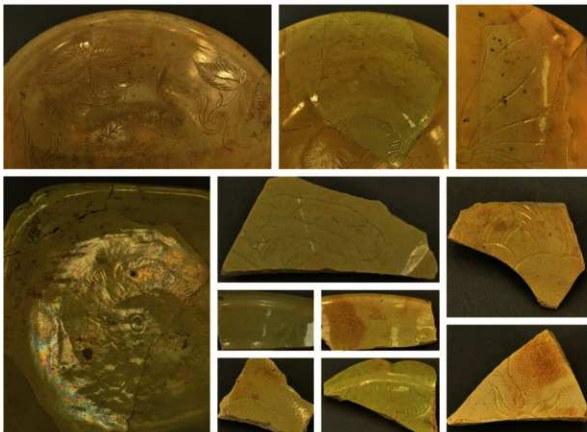
平成 27 年度 京都市埋藏文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書
平安京左京二条二坊「冷然（泉）院」出土品



北築地内溝の土器群



猿投窯産 緑釉陶器



猿投窯産 緑釉陶器 陰刻花文



猿投窯産 灰釉陶器



幡枝窯産 緑釉陶器



044 墨書土器 表



044 墨書土器 裏



044 墨書土器 表
(赤外線画像)



044 墨書土器 裏
(赤外線画像)

ご挨拶

京都市では、膨大な数の出土資料の中から歴史的な意義の大きい考古資料を整理し、市指定有形文化財として登録をすることで、長く未来へ残していく取り組みを続けて参りました。この事業の委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、資料を整理・記録し、正当な価値付けを行うとともに、多くの皆様に活用していただける情報の提供に努めています。

平成21年度から始まった本事業は7年目を迎え、三条せと物や町界隈出土「桃山茶陶」のように、全国から注目の集まる資料が整い始めています。

平成27年度指定候補の“平安京左京二条二坊「冷然（泉）院」出土品”は、冷然院北築地の内溝から出土した、平安時代前期の名帝・嵯峨天皇ゆかりの資料です。嵯峨天皇の離宮・後院時に使用されたと推定される本資料は、出土状況にも恵まれ、質・量ともに様々な検証に耐えうる一級品と言えます。なかでも、中国越州窯系青磁の影響を受けて生産された緑釉陶器を多量に含むことが重要で、平安時代初頭の生産地である京都市（幡枝）栗栖野窯と愛知県（尾張）猿投窯産の製品が共に含まれます。全国的にも類例の少ない猿投窯初期の優品のうち、直径28cmを超える大碗や陰刻花文皿、越州窯系碗を忠実に模した蛇の目高台碗などは、唐風文化に傾倒した嵯峨天皇の嗜好を強く反映した製品と言え、嵯峨朝期の宮廷饗宴を彩ったと考えられます。この他、土師器の高杯、黒色土器、灰釉陶器など様々な器種から構成される本資料は、嵯峨朝期の華やかな雰囲気을想起させ、多くの人々に永く愛されるものとなるでしょう。

なお、拾芥抄に「累代の後院」と書かれた冷然院は、嵯峨天皇崩御後も長期にわたって繁栄し、将来的には各時代の天皇や上皇ゆかりの一括資料が冷然院跡から見つかることも期待できます。本件は、冷然院の実態を示す各期資料群の嚆矢として大きな意義を持つものと言えます。広く皆さまに活用いただければ幸いです。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長
井上 満郎

例言

1. 本書は平成27年度に公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市から委託を受けて実施した埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務の報告書である。指定候補選定にあたっては京都の歴史を理解するうえで重要かつ貴重な遺物群を有効な形で将来につないでいくことを目的とした。
2. 選定の対象とした出土遺物は、京都市内で実施された埋蔵文化財の発掘調査などで出土したもののうち、京都市が保管しているものである。
3. 平成27年度の指定名称(予定)は「平安京左京二条二坊「冷然(泉)院」出土品」である。
4. 本書使用の地図は、主として京都市発行「都市計画基本図(縮尺1:2500)」を参考に、必要に応じて加筆した。
5. 本書の遺物番号は特にことわらない限り指定候補番号である。
6. 指定にあたっての諮問委員は以下の先生方に依頼した。(五十音順/敬称略)
井上満郎・上原眞人・瀧浪貞子・和田晴吾
7. 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の担当は馬瀬智光・赤松佳奈で、鈴木久史がそれを助けた。
8. 指定の準備業務は平尾政幸が行い、大立目一・出水みゆきがそれを助けた。
9. 編修作業は主に平尾政幸が行い、大立目一・津田京美がそれを助けた。
10. 執筆分担は以下のとおりである。

冷然院概要・地理的環境と既往の調査	赤松 佳奈	京都市 文化財保護課
冷然院北内溝出土遺物の概要・指定遺物の内容	平尾 政幸	京都市埋蔵文化財研究所
附編Ⅰ 冷然院北内溝出土土器群の特質	平尾 政幸	京都市埋蔵文化財研究所
附編Ⅱ 冷然院「北築地の内溝」出土軒瓦	上村 和直	京都市埋蔵文化財研究所
附編Ⅲ 冷然院出土の墨書土器 釈文と解説	竹本 晃	京都市埋蔵文化財研究所
附編Ⅳ 冷然院跡出土緑釉陶器軸葉の分析	降幡 順子・尾野 善裕	奈良文化財研究所
11. 本書の図版に使用した写真は村井伸也が、目録に使用した写真は平尾政幸が撮影した。
12. 上記以外の編集業務は(株)文化財サービスがあたった。
13. 指定準備・本書作成にあたっては下記の方々のご協力を得た。(五十音順/敬称略)
家崎孝治・上村憲章・西山良平・吉川義彦・吉野秋二

目 次

京都市 指定文化財（美術工芸品・考古資料）の経緯	1
平安京左京二条二坊「冷然（泉）院」出土品の概要	2
冷然院の概要	2
冷然院年表	4
地理的環境と既往の調査	6
冷然院北内溝出土遺物の概要	9
指定候補遺物の概要	10
文献目録	11
図版	15
写真	17
実測図	30
一覧表	43
附編	51
I 冷然院北内溝出土土器群の特質	53
II 冷然院「北築地の内溝」出土軒瓦	63
III 冷然院跡出土の墨書土器 釈文と解説	67
IV 冷然院跡出土緑釉陶器軸葉の分析	72

京都市 指定文化財（美術工芸品・考古資料）の経緯

京都市では、出土資料保管用の箱で年間約3千箱、累計20万箱以上の遺物が出土しています。膨大な資料の中には、平安宮から出土した一級品、文献に場所が明記されている邸宅からの一括資料、木簡や墨書土器といった文字資料や多量の桃山茶陶など、日本史を研究する上で欠かせない貴重な資料が多数含まれます。

京都市文化市民局文化財保護課では、これらを再整理し、より多くの人々に活用してもらうべく、考古資料を重点的に「京都市指定有形文化財」に登録する取り組みを平成21年度から始めました。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の協力を得て、平成21年度には『京都市埋蔵文化財重要遺物候補選定目録1』を作成し、35件の資料を選定しました。

京都市有形文化財への指定は、平成21年度から26年度まで

平成21年度（第28回）	小倉町別当町遺跡出土 無文銀銭	1点	飛鳥時代後半～末頃
	平安宮内酒殿跡出土「内酒殿」木簡	1点	平安時代前期
	平安京跡出土 人形代	2軀	平安時代前期
	平安宮跡出土 和歌墨書土器	1点	平安時代中期
平成22年度（第29回）	長岡京東南境界祭祀遺跡出土品		
	墨書人面土器	584点	8世紀末
	土製祭祀具	103点	
	木製祭祀具	20点	
	共伴遺物	123点	
平成23年度（第30回）	三条せと物や町界隈出土の 「桃山茶陶（中之町出土品）」	970点	江戸時代初期
平成24年度（第31回）	平安京右京三条二坊十六町 「齋宮」邸出土品	566点	平安時代前期
平成25年度（第32回）	平安京右京三条一坊六町 「西三条第（藤原良相邸）」出土品	1,022点	平安時代前期
	三条せと物や町界隈出土の 「桃山茶陶」（弁慶石町出土品）	311点	江戸時代初期
	平安京右京三条一坊六町 「西三条第（藤原良相邸）」出土品	1,022点	平安時代前期
平成26年度（第33回）	三条せと物や町界隈出土の 「桃山茶陶」（下白山出土品）	279点	江戸時代初期

の3,983点となりました。整理・登録を経て、広く世の人々に認知され、各地の博物館・美術館の特別展に陳列されるなど、皆様目に触れる機会も増えています。

資料を整理する過程で行われる様々な検討は、指定文化財を未来へ残していく事を念頭に、学術的な水準を備え、時間をかけて行われます。7年の取り組みの中で、整理過程で生み出された検討結果を記録として残そうという声が起こりました。本件はその声を受けて、平成27年度京都市指定有形文化財の候補「平安京左京二条二坊「冷然（泉）院」出土品」についての検討結果を報告いたします。

（京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課）

平安京左京二条二坊「冷然（泉）院」出土品の概要

冷然院の概要

冷然院は嵯峨天皇が創建した離宮で、大内裏南東に隣接する平安京左京二条二坊三町から六町の4町を占めていた。鎌倉時代成立の『拾芥抄』には「大炊御門南堀川西、嵯峨天皇御宇、此院累代後院、弘仁亭、本名冷然院云云、而依火災改燃字爲泉、天曆御記、然者改冷然爲冷泉也」と記される。嵯峨天皇のみならず多くの天皇・上皇に世襲財産として伝領、利用された冷然院は「累代の後院」と呼ばれるようになった。

本件は、4町ある敷地の内、三町域で検出した「北築地の内溝」資料である。詳細は後述するが、土器の年代観と内容から、嵯峨天皇存命中に冷然院で使用された土器であり、嵯峨天皇が主導した唐風饗宴の実体を示す一括資料として重要な意義があると考えている。

そこで本節では、冷然院の概要と、史料上にみえる嵯峨天皇期の冷然院および饗宴や喫茶に関する記事を整理しよう。

創建期の冷然院とその後の展開

冷然院の史料上の初見は、弘仁7年(816)8月24日条の「幸冷然院、命文人賦詩、賜侍臣祿有差、」という行幸記事(表1-1)で、創建はこれをさかのぼる弘仁年間初め頃と考えられている(文献目録(以下文)251)。国史には、同年から嵯峨天皇在位期間である弘仁14年の間、冷然院への行幸記事が6回見える(表1)。3回は詩宴、1回は奏楽、2回は行幸のみの記事である。また、弘仁9年に編纂された勅撰漢詩集『文華秀麗集』にも冷然院について詠んだ詩4首がある。この4首は『文華秀麗集』の編纂時期を考えると弘仁7・8年に詠まれたもので、これらの詩から創建したばかりの院には新奇で優美な唐風庭園があったことがうかがえる。

弘仁14年、嵯峨天皇は冷然院に遷御し、同4月10日皇太弟大伴親王(淳和天皇)に譲位、

そのまま院を正式な住まいとした。その後、仁明天皇の即位を契機に嵯峨院に移る承和元年までの11年間、冷然院は嵯峨上皇の居所となった。これが、太上天皇が譲位後に内裏外の離宮を御所とする先例となったようである³³²。承和元年以降、上皇は嵯峨院を御所とし、同9年7月15日同院で崩御した。

上皇崩御後の冷然院は、太皇太后橘嘉智子の居所となり、その後の仁明天皇の時代には内裏修理中の仮御所としても用いられた。終生内裏に居住することのなかった文徳天皇は即位後、東宮雅院、梨本院を居所とし、斉衡元年(854)冷然院に遷り終生をここで過ごした。

文徳天皇の時代まで栄えた最初の冷然院は、清和天皇の御世・貞観17年(875)正月28日の火災で壊滅する。火は3日間燃え続け、この時焼失した建物は54宇にのぼった。秘蔵されていた典籍や文書なども灰燼に帰し、その被害は甚大であった。

以後の冷然院は、天曆3年(949)、天禄元年(970)、長和5年(1016)のたび重なる焼亡後も再建され、清和・陽成・村上・冷泉など

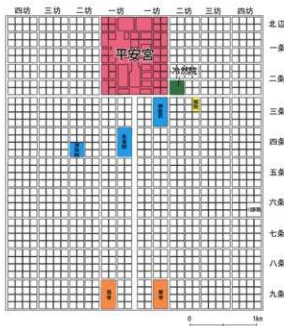


図1. 平安京での冷然院の位置

の天皇および上皇が、里内裏あるいは院御所として利用した。

天曆3年(949)の火災後、「然」の字が「燃」に通じるということから「冷泉院」と改称された。「枕草子」では、朱雀院や閑院とともに「冷泉院」も名邸の一つに数えられている。また『大鏡』には「方四丁にて四面に大路ある京中の家は、冷泉院のみとこそ思候つれ」と書かれた。後一条天皇から後朱雀天皇へ相伝された御院渡文には朱雀院などと共に「代々のわたり物」と記されたことから、冷泉院が皇室の世襲財産として捉えられていたことがわかる。

嵯峨天皇と詩宴

南殿を「紫宸殿」、寝殿を「仁寿殿」というように殿閣・門号を唐風に改めさせた嵯峨天皇は、唐文化を好み、またそれに精通していた。弘仁格・式を整え、諸行事の先例をつくり、それまでとは異なる平安時代の政治や宮廷制度の基本的な枠組みをつくった嵯峨・淳和王朝は、一方で文事と宴を愛し、多方面に優れた人材を輩出した華やかな時代であったと言える。

嵯峨天皇の唐文化への傾倒は、勅撰漢詩集である『凌雲集』・『文華秀麗集』からも推測される。例えば『文華秀麗集』所収の淳和天皇(当時東宮)が冷然院で詠んだ詩

「秋日冷然院新林池、探得池字、応製、一首

君王本自耽幽趣、泉石初看此地奇、
積水全含湖裏色、重巖不謝硤中危、
陔栽晚竹春餘粉、歲淺新林未拱枝、
景物仍堪遊聖目、何勞整駕向瑤池、

を、小島憲之氏の註釈²⁷を借りて訳すと「冷然院の新しく出来上がった林池を詠んだ詩(この際「池」の韻字が分配されてこれを韻としたもの)天子は幽趣を深く好み、ここに新しい林泉を造られた。泉や石の佇まいを初めて天子がご覧になると、そこは奇異で珍しい様子を呈している。池に溜まった水は湖水の深い色を含んでいるようだ。幾重にも重なった巖は峽の中の険しさに

劣らない。小径に晩竹が植えてあるが、その竹は春の名残の粉をふきだし、歳浅い新林にはまだ抱きかかえるほど大きくなった枝はない。風物の眺めはなおそこで天子の目を楽ませるに耐え、車馬を整えて仙境にある瑤池に向かう苦勞をするに及ばない」という。この情景からは、造られたばかりの庭の初々しい様と泉や岩の造作が奇異で珍しく仙境にある瑤池に劣らない一つまり漢詩特有の趣に満ちた様が見取れる。また、別の日に桑原腹赤が冷然院で「曝布の水」を題材に詠んだ詩にも「(前略)晴昔耳聞今眼見。何勞絶粒訪天台。」とあり、「昔音に聴こえた滝を今眼にしているのに、どうして穀物を絶って靈仙のいる天台山の滝を訪れるような苦勞をしようか」と詠まれている。これらの詩から冷然院には、漢詩の世界観が反映された庭園が創設されたと推定される。

嵯峨天皇の唐風好みは喫茶の風習を取り入れたことにも伺える。弘仁6年4月15日、入唐帰朝僧永忠が、近江梵釈寺で嵯峨天皇一行を迎えた時、茶を献じた記事は、喫茶の始まりとして知られる。喫茶の風習事態は定着しなかったが、嵯峨・淳和朝には喫茶が宮廷貴族の間で嗜まれていたようで『凌雲集』には「茶茗」が詠まれた詩が4首ある²⁸。1首は嵯峨天皇が「池亭」で詠んだ詩、1首は仲雄王が「空海にあつて詠んだ詩、2首は藤原冬嗣の邸宅閑院で詠まれた詩である。滋野貞主が閑院で詠んだ詩は、

「夏日 倍幸左大将藤原冬嗣閑院

寂然閑院当馳道、祇候仙輿灑一廬、
酌茗葉堂行徑入、橫琴席傍倚岩居、
松陰絶冷午時後、花氣猶薰風麗餘、
水上青蘋莫赴浪、君王少選愛遊魚、

とあり「酌茗葉堂行徑入。橫琴席傍倚岩居。」は「茶を酌む葉堂に小径を行きて入り、倚岩の前に琴を並べて奏でている」²⁹から、琴のなる庭園で茶を楽しみ、漢詩を作って遊ぶ景色が想像される。国史に記された冷然院での宴もこうした情景の中で行われたのであろう。

表 1-1 冷然院年表

年号	西曆	天皇	記事	出典
弘仁四年八月乙未 (十六)	813	嵯峨	幸皇太弟南池、命文人賦詩、雅樂寮奏樂、賜五位已上衣被、	類聚國史
弘仁四年九月癸酉 (廿四)	813	嵯峨	宣皇太弟於清涼殿、具物川酒法、	類聚國史
弘仁六年正月丁丑 (五)	815	嵯峨	造瓷器生尾張國山田郡人三人家部乙麻呂等三人傳習成業、准雜生聽出身、	日本後紀
弘仁七年八月丁巳 (廿四)	816	嵯峨	幸冷然院、命文人賦詩、賜侍臣祿有差、	類史・紀略
弘仁八年四月壬辰 (三)	817	嵯峨	幸冷然院、令文人賦詩、賜侍臣及文人衣被、	類史・紀略
弘仁十年十月乙卯 (十)	819	嵯峨	幸冷然院、口宣奏樂、賜祿有差、	類史・紀略
弘仁十一年六月丁亥 (十七)	820	嵯峨	幸冷然院、	類史・紀略
弘仁十一年七月丁未 (七)	820	嵯峨	神泉苑、親相撲、	類史・紀略
弘仁十一年八月丙戌 (十六)	820	嵯峨	幸冷然院、令文人賦詩、	類史・紀略
弘仁十三年四月戊寅 (十八)	822	嵯峨	御冷然院、	類史・紀略
弘仁十四年四月甲午 (十)	823	嵯峨	帝遷于冷然院、詔右大臣藤原朝臣冬嗣曰、朕思位在于皇太弟矣、今將果宿心、故避宮焉、冬嗣言曰、聖唯知聖、今陛下以萬機、付託聖人、天下幸甚、但此年之間、豐稔未復、若奉一帝二太上皇、臣恐天下難堪、臣願暫待年復、然後從位、於事不晚、帝曰、朕心素定、又推賢讓位、唯為天下、賢君臨政、何憂年之未復乎、	類史・紀略
弘仁十四年四月庚子 (十六)	823	淳和	帝御前殿、引今上曰、朕本諸公子也、始望不及、於太上天皇、曲垂裝飾、超登儲式、遂遜位于朕、朝辭不獲免、日慎一日、未幾而身嬰疹疾、亦留不學、為萬機壅滯、令右大臣藤原朝臣園人、奉還神璽、朕始有崩聞之志、太上天皇、不允所請、當此之時、有小人之言、令太上皇與朕有隙、公卿相共議、遂君側群少、太上不容惡款、有入東之計、「群臣不安社稷遺遺之、朕赤心有如皦日、朕以寡昧、在位十有四年、太弟與朕、春秋亦同、朕雖乏知人之識、與太弟周旋年久、太弟之賢明仁孝、朕之所察、仍欲從位於太弟、已經數年、今果宿心、宜知之、今上避座跪言、臣以園勞、疏派天潢、昔屬世花塗、自謂不免於禍、會逢聖明、更同再生、幸莫大焉、又何所望、而陛下殊異、忝登儲冊、然身有犬馬之病、不堪承統之狀、屢請右大臣、戰々兢兢、得到于今、而今復以大寶、俯授愚蒙、心魂迷惑、不敢承勅、帝不許、仍答曰、今日以前、朕謂太弟如子、今日以後、遇朕亦如子耳、今上奉曰、臣聞、云々、帝不聽、曰、現在神(止)大八洲所知、云々、」翌日、今上朝于冷然院、重表抗議曰、云々、帝遂不許、	日本紀略
天長二年正月戊申 (四)	825	淳和	掖庭公主參觀冷然院、賜陪從大夫已下祿、	日本紀略
天長二年十一月丙申 (廿八)	825	淳和	奉賀太上天皇五八之御齡、白日既傾、麗之以燭、雅樂奏樂、中納言正三位良岑朝臣安世、下自南階舞、群臣亦率舞、投暮雨雪、輕花弘舞、冒夜而麗、賜祿有差、有詔、未得解由大夫等、皆預賜祿之例、又別賜參議已上冷然御被、	類史・紀略
天長五年二月庚子 (十三)	828	淳和	左京三条一坊・山城國愛宕郡白田取充院、	日本紀略
天長七年正月庚辰 (五)	830	淳和	皇后謁冷泉院、為賢正也、	日本紀略
天長七年七月庚寅 (十八)	830	淳和	相撲司率相撲等、參冷然院、	類聚國史
天長七年八月丁卯 (廿六)	830	淳和	皇后謁冷然院、奉賀新造寢殿、兼獻珍麗、	日本紀略
天長八年正月壬寅 (三)	831	淳和	皇后謁冷泉院、	日本後紀
天長八年七月癸丑 (四)	831	淳和	相撲人十八、令參冷然院、	類史・紀略
天長八年八月己巳 (四)	831	淳和	乘輿幸南池、命文人令賦詩、親王以下六位文人以上、賜祿有差、使近衛少將藤原朝臣豐主、所獲鮮魚、獻冷然院、賜被復命、	日本紀略
天長八年十二月癸巳 (廿九)	831	淳和	新誕皇子於冷泉院彌、	日本紀略
天長九年二月乙亥 (十一)	832	淳和	秀良親王、於冷然院、加元服、授三品、拜賀了、賜宣賜祿、	類史・紀略
天長十年二月丙戌 (廿九)	833	仁明	(中略) 天皇乃命車駕拜謁太上天皇乃太皇太后於冷然院、	日本紀略
天長十年八月癸巳 (十)	833	仁明	天皇謁觀先太上天皇及太皇太后及冷然院、	日本紀略
承和元年正月甲寅 (三)	834	仁明	後太上天皇賀先太上天皇於冷然院、以入新年也、先太上天皇乍驚、遽迎中庭、	統後紀
承和元年正月乙卯 (四)	834	仁明	天皇朝謁先太上天皇、及太皇太后於冷然院、」是日、先太上天皇亦御涼和院、以相賀也、	統後紀
承和元年二月戊戌 (十七)	834	仁明	武藏國幡羅郡荒畑田廿三町奉充冷然院、	統後紀
承和元年八月辛巳 (三)	834	仁明	上為先太上天皇及太皇太后、置酒於冷然院、自上奉玉卮、伶官奏樂、令源氏兒童舞于殿上、極歡而罷、以緇一萬屯賜五位已上并院司祿各有差、太上天皇及太皇太后將遷御嵯峨新院、故有此謬設也、	統後紀
承和元年八月丁亥 (九)	834	仁明	先太上天皇遷御嵯峨院、	統後紀

表 1-2 冷然院年表

年号	西暦	天皇	記事	出典
承和二年三月丁巳(十二)	835	仁明	勅、後太上天皇御封二千戸、皇太后御封一千戸、准冷然院御封行之、若富有損年、以公相補、舍全進之。	続後紀
承和二年三月庚申(十五)	835	仁明	鑄印一面、充冷然院。	続後紀
承和五年十一月癸未(廿九)	838	仁明	先太上天皇先御冷然院、次御神泉苑、故車學水禽、天皇獻御馬四匹、鷹鷲各四聯、鳴鳥犬及御屏風、種種瓶好物。	続後紀
承和九年四月乙亥(十一)	842	仁明	天皇遷御冷然院、以修理内裏也。	続後紀
承和九年七月丁未(十五)	842	仁明	太上天皇崩于嵯峨院、春秋五十七。	続後紀
承和九年七月庚戌(十八)	842	仁明	是日、冷然院西約臺東山邊松樹一株、其高丈五尺許者、無故自折、食以爲異。	続後紀
承和九年九月戊午(廿七)	842	仁明	冷然院大垣西北角、無故傾壞二許丈。	続後紀
承和九年十一月丁未(十七)	842	仁明	遷自冷然院、御于本宮。	続後紀
承和九年十二月乙丑(五)	842	仁明	嵯峨太皇太后遷御于冷然院、淳和太皇后崩入道。	続後紀
承和十一年正月丙戌(三)	844	仁明	天皇朝觀太皇太后於冷然院、講樂終日、賜祿從五位上祿有差。	続後紀
承和十一年三月己酉(廿六)	844	仁明	天皇朝觀太皇太后於冷然院、宴侍從已上、賜祿有差。	続後紀
承和十一年八月庚子(二十)	844	仁明	嵯峨太皇太后不豫、遣中使奉問起居。	続後紀
承和十三年正月乙巳(三)	846	仁明	天皇朝觀太皇太后於冷然院。	続後紀
承和十五年四月丙午(十七)	848	仁明	上幸冷然院、賜祿從親王及侍從等祿。	続後紀
嘉祥二年三月乙亥(廿一)	849	文德	行幸壹傍、廻幸冷然院觀魚。	続後紀
嘉祥三年正月癸未(四)	850	文德	天皇朝觀太皇太后於冷然院、親王以下、歡宴酣樂、賜祿有差。	続後紀
嘉祥三年二月丙子(廿七)	850	文德	勅、攝津國荒廢田除拾壹町爲冷然院田	続後紀
嘉祥三年三月辛丑(廿三)	850	文德	嵯峨太皇太后依病入道。	続後紀
嘉祥三年五月辛巳(四)	850	文德	嵯峨太皇太后崩。	文德
仁壽二年正月庚午(三)	852	文德	帝朝中宮於冷然院、群臣扈從者賜宴於東約臺、五位已上盡會、特有恩詔、未得本任放還者亦預席、賜祿有差。	文德実録
仁壽二年二月庚寅(朔)	853	文德	帝幸冷然院、厭景物也、賜侍臣祿有差、即日、赤幸右大臣藤原朝臣良房第、以覽櫻花、置酒興樂、六位以上會者、各各有差。	文德実録
齊衡元年四月丁卯(十三)	854	文德	帝自梨下院、移御冷然院、五位已上扈從者賜宴於約臺。	文德実録
齊衡三年二月辛卯(十八)	856	文德	請僧百三十人於大極殿及冷然院、分讀大般若經。	文德実録
齊衡三年五月庚戌(九)	856	文德	請僧二百五十人於大極殿、及冷然院、貢錢、松尾神社、分讀大般若經、限三日訖、獲度免也。	文德実録
齊衡三年八月丁丑(七)	856	文德	冷然院及八省院、太政官廳前、同時虹見、記異也。	文德実録
天安元年三月甲辰(七)	857	文德	前略 是日請樂僧百五十人於冷然院新成殿及大極殿、限以三ケ日、轉讀大般若經。	文德実録
天安元年六月癸巳(廿八)	857	文德	是日、請名僧廿八人於冷然院、轉讀大般若經、限以四ケ日。	文德実録
天安元年七月甲寅(十九)	857	文德	虹當冷然院北門東數而見也。	文德実録
天安元年七月己未(廿四)	857	文德	請名僧六十人於冷然院、令轉讀大般若經、限以三ケ日。	文德実録
天安元年八月乙酉(廿一)	857	文德	請僧六十人於冷然院、限五ケ日、轉讀大般若經。	文德実録
天安元年十月乙丑(朔)	857	文德	親王公卿及侍從已上、侍於東約臺歡宴、有勅奏音樂、賜祿有差。	文德実録
天安元年十月丙子(十二)	857	文德	正四位下因幡權守南壽朝臣永河卒、略(弘仁)十四年四月天皇崩讓之祭、叙從四位下、爲内藏頭、有勅、爲冷然院別當、俄而兼爲越前守。	文德実録
天安元年十月癸巳(廿九)	857	文德	冷然院南大庭大祓、祿奉幣八幡大菩薩宮使進發也。	文德実録
天安元年十一月丙辰(廿三)	857	文德	不御豐樂院、便於冷然院、命公卿開宴、百寮俱張、五節舞應、尚如向龍船之時、賜祿亦如常。	文德実録
天安二年四月辛丑(十)	858	文德	於冷泉院南路大祓、爲遣請名神社奉幣使之使也。	文德実録
天安二年五月壬午(廿二)	858	文德	大雨、洪水汎溢、河流盛溢、水勢滔々、平地浩浩、橋梁斷絕、道路成川、東垣山水入冷然院、庭中如池、左衛門陣直廬浮流、公卿諸司百寮、各率偃下、或草履、或徒跣、競赴水畔、壑決漂流、池魚浮滿、鰓尾甚多、亦左右京被水者、流死者衆矣。	文德実録
天安二年八月己丑(朔)	858	文德	是日、有勅、親王公卿及侍從、令陪於東約臺歡宴、左近衛府開奏音樂、醒暢之後、或起偷舞、賜祿有差。	文德実録
天安二年八月癸丑(廿五)	858	文德	親王公卿候東約臺、有慶夜之事。	文德実録
天安二年八月甲寅(廿六)	858	文德	前略 屈名僧五十人於冷然院、令讀大般若經、限以五ケ日。	文德実録
天安二年八月乙卯(廿七)	858	文德	帝崩於新成殿。	三代実録
貞觀三年七月辛卯(十九)	861	清和	以尾張國愛智郡荒廢田一百八町六段三百步、充冷然院。	三代実録
貞觀四年十二月辛丑(七)	862	清和	相模國大住郡荒廢田卅二町、奉充冷然院。	三代実録
貞觀十七年正月壬子(廿八)	875	清和	夜、冷然院火、延燒舍五十四宇、秘閣收藏圖籍文書爲灰燼、自餘財寶無有子遺、唯御願書寫一切經、因緣業教、僅得令存。	三代実録

地理的環境と既往の調査

冷然院の所在地平安京左京二条二坊三町から六町は、現在、二条城（国史跡旧二条離宮）の北西部から堀川通、竹屋町通と北側一部に該当する。上京区竹屋町通猪熊西入ル藁屋町・西堀川竹屋町上ル下堀川町、中京区二条通堀川西入ル二条城町の範囲に、約252m四方の敷地が推定されている。

この範囲内では、現在までに10件の調査（参考文献参照）が行われている。冷然院の大部分が二条城内に含まれていることから、うち6件は史跡整備に伴う調査で、平成13年度の調査では平安時代中期の池と景石が検出された^{2,17}。史跡では基本的に、平安時代にさかのぼる遺構を調査する機会は多くないが、平安時代中・後期の遺構も一部で確認されている。

これに対し、城外では5件の発掘調査が行われ、竹屋町通の北側で行われた3件の調査では平安時代前期の遺構が確認された。冷然院「北築地の内溝」は、これらの調査で築地外側を走る大炊御門大路側溝とともに検出された。

現在の竹屋町通は大炊御門大路とほぼ重複するが、二条城外堀に沿う部分は、真北に対して東に約3度振れている。城築造時の方位基準が磁北であったため真北に近い平安京の方位と約3度のズレが生じ、平安京の大路をそのまま踏襲していれば道路になっていた部分が宅地となって発掘調査されるに至った。

資料選定について

本件は、平安時代を代表する邸宅「冷然院」の実態を示す各期遺物群の嚆矢として選定した。選定にあたっては、他遺構出土の平安時代前期の良好な資料や、時期の異なる対比可能な一括資料を探したが、現時点では該当するものが見つからなかった。平成13年度の調査で検出された中期の庭は、幾度か作り替えられており、景石を漸移的に埋没させている土に含まれる遺物では良好な一括資料とはならない。

ただし、冷然院に関する遺構は二条城によって守られており、今後各画期に対応する一括資料が出土することも期待される。良好な資料が調査される機会を待ちたい。

調査概要

竹屋町通の北側で行われた3件の調査について概説する。

昭和57年度に京都市埋蔵文化財研究所が行った調査①^{2,13}は、猪熊小路に面した三町の東端にあたる区画で行われた調査で、平行に走る二条の東西溝が検出された。平安京の条坊モデルに対照すると、北は大炊御門大路南側溝、南は冷然院北築地の内溝であることが明らかで、検出された直線的な東西溝（SD3）は、多量に投棄された平安時代前期の遺物で埋まっており、優品の緑釉陶器と「近」銘のある軒丸瓦などが出土した。

平成6年度に関西文化財調査会が行った調



図2. 冷然院跡内での既存の調査



1. 昭和57年度 調査①東西溝 (SD3)



2. 平成6年度 調査②南区全景 (手前が内溝)



3. 平成6年度 調査②SD401 断面



4. 平成23年度 調査③溝38 断面

図3. 調査①～③検出の北菜地の内溝

査②²²¹は、二坊二・三町にまたがり、北区と南区の2区で調査が行われた。二条城の北エリアは、近世に京都所司代上屋敷や関連施設が立ち並んでいたため、江戸時代の遺構で平安時代の遺構の多くが削られていた。しかし、南区では比較的平安時代の遺構が残っており冷然院北築地の内溝(SD401)や、大炊御門大路の南側溝が検出されている。北区では、京都所司代に伴う遺構が多く確認され、平安時代の遺構はほとんど残っていなかったが、大炊御門大路北側溝の痕跡を確認している。

平成23年度に古代文化調査会が行った調査③²²⁰では、竹屋町通に面するA区で冷然院北築地の内溝(溝38)と大炊御門大路の南側溝、B区では大炊御門大路の北側溝を確認し、大路の幅がわかった。

隣接する3件の調査を合わせると溝の長さは60m以上におよび、二坊三町北辺の半分(1町の一辺の長さは約120m)を確認したことになる。また溝は、東西ともに調査区壁面で、さらに東西に延びていると考えられる。

溝の規模と特徴

溝の規模は幅約0.9～1.0m、検出面からの深さは約0.9mと遺存状態は良好である。肩から底にむかって側壁が直に落ち、幅と同じ深さがある。断面は深いU字状を呈しており、埋

土には多量の遺物を含む。調査②の初見では、溝内の堆積土は5層に細分され、暗褐色泥土の中層、黒褐色・暗灰黄色砂泥の下層に多量の遺物が含まれていた。最下層は砂礫層である。また、上層は溝埋設後の浅い凹みに堆積した土で、平安時代後期の遺物を含んでいた。この特徴は各調査地で共通する。短期的に埋められた状況が観察され、掘り直しは認められない。中層以下の埋土からは京都編年1期新段階(810～840)の特徴を持つ土器が多量に出土した。

北辺を限る北築地の内溝であるにも関わらず、造営後程なく埋まり、掘り直しが認められないことは、今後の課題である。

貞観17年(875)の焼亡まで、嵯峨皇后橘嘉智子や文徳天皇によって継続的に使用され、院内の建物が54字にのぼっていたことを考えると三町が放棄されたとは考え難く、二条城内の調査では平安時代中・後期の遺構が確認されていることから、先に述べた冷然院の長い存続期間に様々な建物が建てられたことは確かと言える。現時点では1期新段階の下限(840年)前後の時期に内溝は埋められ、以後北辺は縮小したと推測される。この解釈については是非は、調査事例の増加を待たねばならないが、遺物が示す時期に多量の廃棄物とともに短期的に埋められたことは確実で、このことから出土遺物の高い一括性が説明される。



図4. 調査①～③ 配置図

冷然院北内溝出土遺物の概要

今回の指定候補となった遺物群が出土した冷然院北築地内側の溝は、3件の調査によって院の北辺中央付近から西にほぼ連続的に約60m検出されている。この長さは冷然院北西部にあたる左京二条二坊三町北辺の約2分の1に該当する。調査の概要でも触れたように溝の遺存状態は良好で、多量の遺物を含む土砂で短期間に埋められた状況を呈していた。

遺物の大半は土器類で、そのほかに少量の瓦類と、緑色の石製銚具（鉈尾）が1点出土している。土器類の総破片数は111,866片にのぼるが、その93%強が土師器である。具体的な数値は表2に示すとおりであるが、土師器に次いで緑軸陶器が3,069片と多数を占める点が注目される。

土師器 104,164 片のうち 95,774 片 (91.9%) が 椀・杯・皿・などの小型食器類

表2 冷然院北内溝出土遺物の組成 (破片数)

種類	器形	破片数	比率1	比率2
土師器	椀・皿・杯	95,774	91.9%	93.1%
	高坏	4,438	4.3%	
	甕	3,695	3.5%	
	その他	3	0.0%	
	不明	404	0.4%	
	小計	104,164	100.0%	
黒色土器	椀・皿・杯	1,399	71.1%	1.8%
	甕	421	21.4%	
	その他	137	7.0%	
	不明	11	0.6%	
	小計	1,968	100.0%	
須恵器	椀・皿・杯	533	22.5%	2.1%
	壺・瓶	313	13.2%	
	鉢	972	41.1%	
	甕	559	23.6%	
	その他	0	0.0%	
	不明	2	0.1%	
小計	2,365	100.0%		
緑軸陶器	椀・皿	2,998	97.7%	2.7%
	壺・瓶	58	1.9%	
	その他	12	0.4%	
	不明	1	0.0%	
	小計	3,069	100.0%	
白色土器	椀・皿	99	100.0%	0.1%
	壺・瓶	0	0.0%	
	他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	99	100.0%	
灰軸陶器	椀・皿	146	72.6%	0.2%
	壺・瓶	55	27.4%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	201	100.0%	
合計		111,866		100.0%

で、つまり全破片の85%強が土師器の食器類である。大多数を占める土師器を除いた小型食器類の比率についてみると、多い順に緑軸陶器57.9%・黒色土器27.0%・須恵器10.3%・灰軸陶器2.8%・白色土器1.9%となり、緑軸陶器が6割近くを占める非常に特異な土器組成を示している。

椀・杯・皿以外の土師器としては高杯・甕のほか少量の鉢類等がある。高杯の比率が高い点もこの遺物群の特徴の一つである。

緑軸陶器はほとんどが椀・皿類で、他に壺瓶類・鉢・合子などのほか火舎・炬がある。緑軸陶器は山城幡枝産が多数を占めるが、尾張狼投産の良質な製品も多数含まれており、精緻な陰刻花紋を施した椀や皿がある。

黒色土器では約7割が食器類で、他に風字碗などがある。緑軸陶器ほど食器類の比率が高くないのは、甕・鉢を一定量含むことによる。食器類には通常の杯のほか口縁部が反し細い輪高台の施軸陶器を模した形態の椀や皿がある。

須恵器で最も多いのは鉢類で、甕がそれに次ぐ。このため杯・皿などの食器類は他の器種に比べて少ない。

灰軸陶器も7割強が椀・皿類で、他は壺・瓶類である。椀皿類では上面に厚く降下軸が掛かった製品が多いが、ほとんどの個体の底部外面にはトチン痕跡が認められることから重ね焼きの最上段の製品が選択的に供給されていることが窺える。

白色土器は99片出土しているが、すべて椀・皿類である。ほとんどが小片のため全体の形状がわかる資料はないが、底部や口縁部の形態からみて幡枝産緑軸陶器と同形である。

瓦類では軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土している。軒瓦には大きく分けておそらく前身施設に使用されていた可能性のある、冷然院以前に遡るものと冷然院所用のものがある。後者には瓦当面に「近」銘を持つ軒丸瓦などがあるが詳細は附章に譲る。

指定候補遺物の概要

前節で述べた冷然院北築地内溝出土遺物から352点を京都市指定文化財候補として選択した。その内訳は表3に示したとおりである。

指定候補の選択にあたっては、調査報告書に掲載されているものを中心に、嵯峨天皇・上皇期の冷然院で使用された土器類の全体像が捉えられるように配慮するとともに、出土比率に応じた土器類の種類・器形のバリエーションを集めるようにした。ただし土器器食器類に限り出度量が膨大であるため、器形の選択は同様の基準によったが、候補とした点数は帰属年代と内容が知り得る量にとどめた。他器種、とくに緑軸陶器に関してはそれがこの土器群の特性をよく表しているため、異なる器形については小片の場合も選択の対象とした。以下に指定候補遺物の概略を記す。

土師器には碗・杯・皿・高杯・甕がある。土師器そのものの特徴としては一般的な平安京出土土器群と大きな差異はないが、高杯あるいは大型の杯Bの比率が高い点が特徴的である。

黒色土器の食器類では杯が少なく、口縁部が外反し細い輪高台を持つ、施軸陶器に類似した碗・皿が主体をなす。また甕の比率が高く形態的なバリエーションも多い。

須恵器はこの時期の平安京出土土器群としては非常に少なく、特に杯・皿類をみれば多量の出土量を示す土師器を除いても、緑軸陶器・黒色土器に次ぐ位置にあり、ここでは食器類としては重視されていなかったようである。鉢類が4割を占めており、同時期の京内資料の平均値1割程度からみて特異的である。

緑軸陶器は碗・皿が圧倒的多数を占め、出土量の97.7%に達する。皿のほとんどが12～15cmのものであるのに対して、碗類には最大28cm台から最小9cmのものまで多様に富む。緑軸陶器には山城（洛北幡枝窯）産と尾張（猿投窯）産の2種があるが、量的には前者が主体で後者は約5%を占めるにすぎない。しか

し、品質面からみれば粗製品の多い山城産に比べ、尾張産の製品にはヘラミガキ等の調整が良好で軸層が厚く均質で、器形も唐代越州窯産の器物に通じるものが多く、明らかに山城産とは異なる規範で生産されていたことがわかる。

灰軸陶器は緑軸陶器と同様に碗・皿が7割強の主体を占めるが、緑軸陶器と比べると壺・瓶類の比率が高い。すべて尾張（猿投窯）産であり、形態は尾張産緑軸陶器と共通する。当該期の平安京の出土資料では緑軸陶器の半数程度含まれているのが一般的であるが、ここでは灰軸陶器全体でみても緑軸陶器の1/10以下ときわめて少量である。碗・皿類に限れば、緑軸陶器の2,998片に対して146片の出度量しかなく、冷然院で使用された施軸陶器が基本的に緑軸陶器であったことを端的に示している。

なお白色土器については小片の資料しかなく、今回の指定候補としては取り上げなかった。

表3 平成27年度京都市指定文化財候補一覧

種類	器形	点数	小計
土師器	碗A	23	
	杯A	16	
	皿A	30	
	杯B・杯B蓋	29	
	高杯	12	
	甕	19	129
黒色土器	杯A	7	
	碗B	6	
	皿B	6	
	鉢	2	
	蓋	1	
	甕	17	
	碗	2	41
須恵器	杯A	10	
	杯B・杯B蓋	9	
	鉢	5	
	壺・壺蓋	7	
	甕	2	
	碗	3	36
緑軸陶器	碗・碗蓋	61	
	皿類	35	
	壺	1	
	水注	7	
	炬・火舎	2	
	台付鉢	1	
	合子・その他	2	109
灰軸陶器	碗	7	
	皿	5	
	壺A・壺蓋	3	15
瓦類	軒丸瓦	10	
	軒平瓦	11	21
石製品		1	1
	鉈尾		
	総計		352

文献目録

史料

01. 『新訂増補 国史大系 日本後紀』国史大系編修會 吉川弘文館 1972
02. 『新訂増補 国史大系 類聚国史第一』国史大系編修會 吉川弘文館 1979
03. 『新訂増補 国史大系 日本紀略第二(前篇下)』国史大系編修 吉川弘文館 1979
04. 『新訂増補 国史大系 続日本後紀』国史大系編修會 吉川弘文館 1971
05. 『新訂増補 国史大系 日本文徳天皇實録』国史大系編修會 吉川弘文館 1977
06. 『新訂増補 国史大系 日本三代実録』前篇・後編 国史大系編修會 吉川弘文館 1973
07. 『日本古典文学大系69 懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』岩波書店 1964
08. 『新訂増補 国史大系 延喜式 中篇』国史大系編修會 吉川弘文館 1972
09. 『拾芥抄(尊経閣善本影印集成)』前田育徳会尊経閣文庫編 八木書店 1998
10. 『新日本古典文学大系 25 枕草子』佐竹昭広ほか編 岩波書店 1991
11. 『日本古典文学大系 21 大鏡』松村博司 岩波書店 1960

発掘調査報告書(冷然院跡内)

12. 辻 裕司1983 「左京二条二坊(3)史跡二条城」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』
13. 上村和直・吉崎伸1984 「左京二条二坊(2)」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』
14. 久世 康博1984 「左京二条二坊(3)史跡二条城」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』
15. 菅田 薫1995 「宮南東部(6)」『平安宮1京都市埋蔵文化財研究所報告第13冊』
16. 大立目 一2002 『史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮神祇官・平安宮冷然院跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-12
17. 平田 泰2003 『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-15
18. 尾藤 德行2006 『史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮冷然院跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2005-16
19. 山本 雅和2010 『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-15
20. 上村 憲章2012 『平安京左京二条二坊二・三町 二条城北遺跡』古代文化調査会
21. 吉川 義彦2014 『平安京発掘調査報告 左京二条二坊二・三町 冷然院・神祇官町・大炊御門大路・二条城北遺跡』関西文化財調査会

論文(冷然院関係)

22. 太田 静六1937 「冷泉院と里内裏(寝殿造の研究・其2)」『建築学会論文集』5
23. 所 京子1969 「平安前期の冷然院と朱雀院-「御院」から「後院」へ-」『史叢』28 京都女子大学史学会
24. 村井 康彦1970 「平安京の形成」『京都の歴史1 平安の新京』京都市
25. 太田 静六1987 「冷然院の考察」『寝殿造の研究』吉川弘文館
26. 藤谷 寿1993 「れいぜいりん」『国史大辞典』14 吉川弘文館
27. 関口 力1994 「冷泉院 れいぜいりん」『平安時代史辞典』角川書店

論文(古代史)

28. 八代 国治 1904 「後院の考」『史学雑誌』十五編九号
29. 中村直勝 1922 「後院と後院領」『歴史と地理』10 (3) 史学地理学会 星野書店
30. 石母田 正 1956 『古代末期の政治過程及び政治形態』岩波書店
31. 村井 康彦 1965 『古代国家解体過程の研究』岩波書店
32. 目崎 徳衛 1969 「政治上の嵯峨上皇」『日本歴史』248 日本歴史学会編
33. 林屋 辰三郎 1970 「神泉苑と嵯峨院」『京都の歴史1 平安の新京』京都府
34. 渡辺 直彦 1972 「嵯峨院司の研究」『日本古代官位制度の基礎的研究』吉川弘文館
35. 小島 憲之 1973 『国風暗黒時代の文学』筑書房
36. 橋本 義則 1976 「後院について」『平安貴族社会の研究』吉川弘文館
37. 佐藤 宗淳 1977 『平安前期政治史序説』東京大学出版
38. 林屋 辰三郎 1978 「後院の創設—嵯峨上皇と檀林寺をめぐる—」『中世日本の歴史像』日本史研究会 史料研究部会編 創元社
39. 保立 道久 1979 「律令制支配と都鄙交通」『歴史学研究』468
40. 門脇 禎二 1981 『日本古代政治史論』筑書房
41. 保立 道久 1988 「古代末期の東国と留任貴族」『中世東国史の研究』東京大学出版会
42. 春名 宏昭 1991 「平安期太上天皇の公と私」『史学雑誌』100-3
43. 橋本 義則 1997 「史料から見た嵯峨院と大覚寺」嵯峨院の成立から大覚寺の再興まで 『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告』大沢池北岸城復原整備事業に伴う調査 奈良文化財研究所
44. 山本 崇 1999 「淳和院考—平安前期の院について—」『立命館史学』20 立命館史学会
45. 玉井 力 2000 「平安時代の貴族と天皇」『日本古代政治史論』岩波書店

論文(施釉陶器生産)

46. 三宅 米吉 1913 「陶器概説」『考古学雑誌』3-11
47. 中山 平次郎 1915 「瓷器に就いて」『考古学雑誌』5-11
48. 樋畑 雪湖 1916 「延喜の瓷器に就いて」『考古学雑誌』6-8
49. 笠井 新也 1916 「延喜式の瓷器に就いて 樋畑雪湖君に答ふ」『考古学雑誌』6-10
50. 藤岡 了一 1957 「奈良・平安時代の施釉陶」『世界陶磁全集』第2巻 河出書房
51. 橋崎 彰一 1966 「猿投山西南麓古窯址群」『続日本陶磁名宝展シリーズ』第11回猿投出土陶・三彩と緑釉陶展 五島美術館
52. 本多 静雄 1966 「猿投山西南麓古窯址群の発見」『続日本陶磁名宝展シリーズ』第11回猿投出土陶・三彩と緑釉陶展 五島美術館
53. 橋崎 彰一 1973 『陶磁大系 三彩・緑釉・灰釉』平凡社
54. 橋崎 彰一 1976 『日本の陶磁 古代中世編2 三彩・緑釉・灰釉』中央公論社
55. 田中 琢 1974 「鉛釉陶の生産と官営工房」『日本の三彩と緑釉』五島美術館
56. 橋崎 彰一 1976 『日本陶磁全集6 白瓷』中央公論社
57. 橋崎 彰一 1977 『日本陶磁全集5 三彩 緑釉』中央公論社
58. 星野 達雄 1977 「「弘仁瓷器」と尾張瓷器についての覚書」『法政考古学』1 法政考古学会
59. 坂野 和信 1978 「日本古代施釉陶器再検討[1]—初期の鉛釉陶・灰釉陶—」『日本考古学雑誌』65-2

60. 興 淳一郎 1983 「古代窯業生産の展開—西日本を中心として—」『文化財論叢』 同朋社出版
61. 前川 要 1989 「平安時代における施軸陶磁器の様式論的研究(下)」『古代文化』41-10
62. 山下 峰司 1991 「<弘仁瓷器>と国御工房」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』 瀬戸市歴史民俗資料館
63. 平尾 政幸 1993 「弘仁瓷器直前の緑軸淡彩陶器」『杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究』 杉山信三先生米寿記念論集刊行会編 真陽社
64. 高橋 照彦 1994 「平安初期における鉛軸陶器生産の変質」『史林』77-6 史学研究会
65. 上村 和直 1994 「平安京周辺の施軸陶器生産」古代の土器研究会第3回シンポジウム『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施軸陶器—』
66. 平尾 政幸 1994 「緑軸陶器の変質と波及」古代の土器研究会第3回シンポジウム『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施軸陶器—』
67. 平尾 政幸 1994 「緑軸陶器・灰軸陶器・白色土器」『平安京提要』角川書店
68. 高橋 照彦 1995 「平安期緑軸陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告』60
69. 尾野 善裕 1998 「灰軸陶器生産技術の系譜」『橋崎彰一先生古希記念論文集』 真陽社
70. 尾野 善裕 2001 「奈良三彩の起源と唐三彩技術/意匠の系譜について」『美術フォーラム21』4 醍醐書店
71. 高橋 照彦 2002 「日本古代における三彩・緑軸陶の歴史的特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』94
72. 橋崎彰一・興淳一郎・平尾政幸・尾野善裕 2001 「100回記念座談会 三彩から緑軸へ」『古代の土器研究』4 古代の土器研究会。
73. 尾野 善裕 2002 「平安時代における緑軸陶器生産・流通と消費 尾張産を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』92
74. 尾野 善裕 2003 「古代の尾張・美濃における緑軸陶器生産」古代の土器研究会第7回シンポジウム『古代の土器研究 平安時代の緑軸陶器—生産地の様相を中心に—』
75. 尾野 善裕 2002 「嵯峨朝の尾張における緑軸陶器生産とその背景—平安時代初期の喫茶文化との関わりを通して—」『古代文化』
76. 平尾 政幸 2003 「平安時代の緑軸陶器生産に関するいくつかの問題」古代の土器研究会第7回シンポジウム『古代の土器研究 平安時代の緑軸陶器—生産地の様相を中心に—』
77. 平尾 政幸 2011 「猿投窯産緑軸陶器と嵯峨源氏」平安京〈居住と住宅〉研究会資料
78. 尾野 善裕 2004 「嵯峨天皇の中国趣味と鉛軸陶器生産の挑戦」『美術フォーラム21』10 醍醐書店
79. 尾野 善裕 2013 「古代尾張における施軸陶器生産と歴史的背景」『新修名古屋市史 資料編 考古2』

論文(中国陶磁)

80. 矢部 良明 1994 「平安貴族と中国陶磁」『日本陶磁の一万二千年 渡来の技 独創の美』 平凡社
81. 温州博物館 2001 『温州古陶瓷』 文物出版社

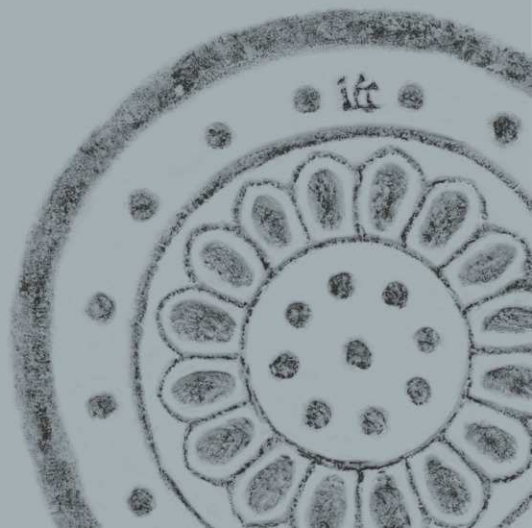
論文(喫茶)

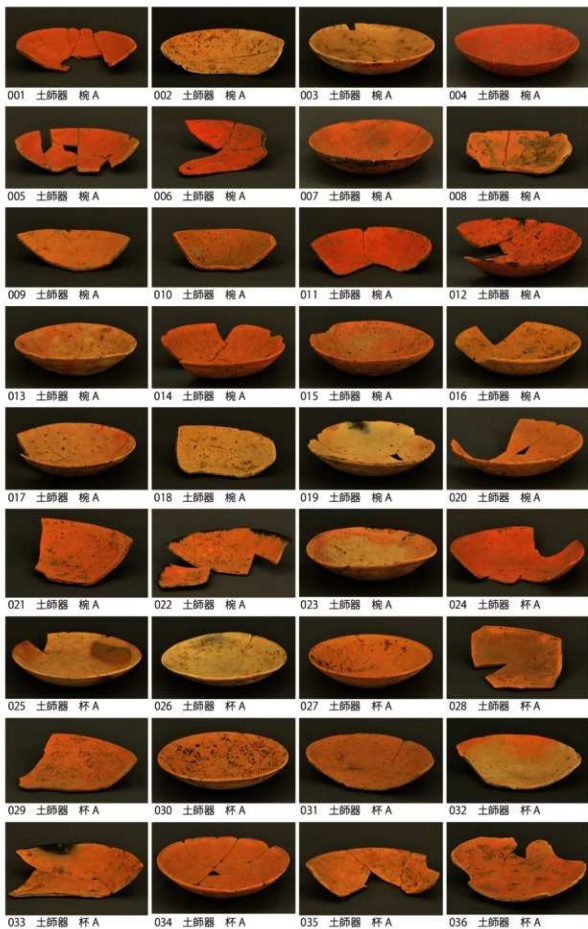
82. 村井 康彦 1979 『茶の文化史』岩波新書(黄版) 89 岩波書店
83. 尾野 善裕 2002 「日本人と茶の千二百年」特別展覧会『日本人と茶—その歴史・その美意識—』京都国立博物館
84. 福地 昭助 2006 「平安時代の茶『喫茶養生記』まで」 角川学芸出版
85. 布目 潮風 2012 『茶経』: 全訳注 講談社

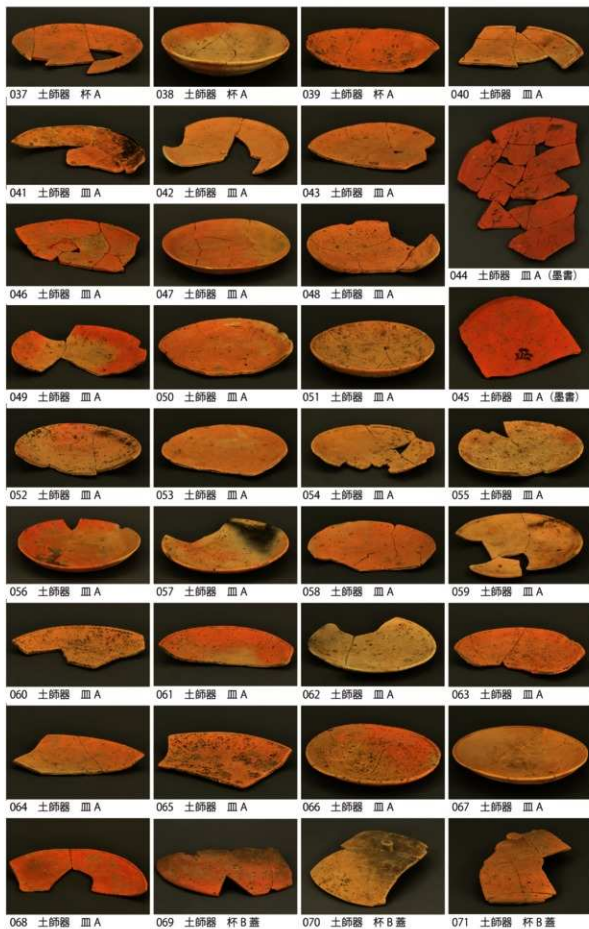
図録

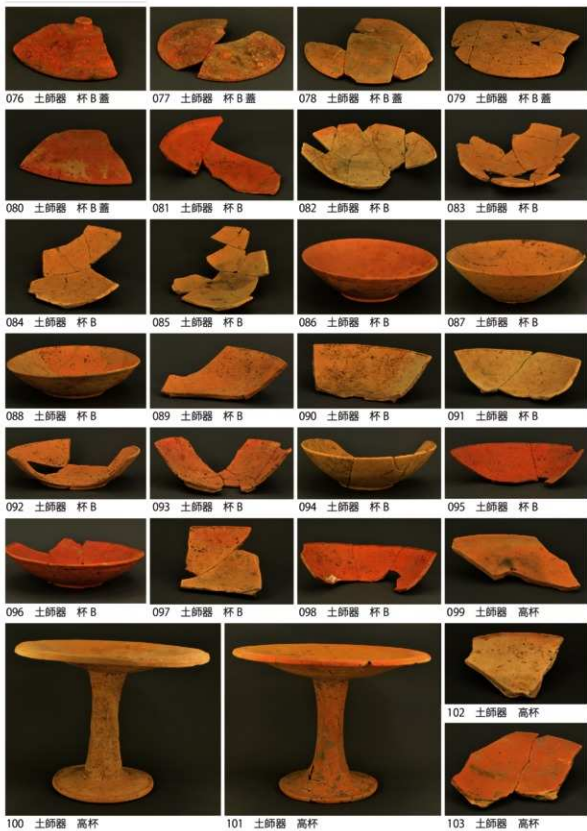
86. 京都市埋蔵文化財研究所 1980 『平安京跡発掘資料選』 京都市考古資料館
87. 京都市埋蔵文化財研究所 1986 『平安京跡発掘資料選 (二)』 京都市考古資料館
88. 愛知県陶磁資料館 1998 『開館20周年記念特別企画展 日本の三彩と緑釉—天平に咲いた華—』
89. 五島美術館 1974 『日本の三彩と緑釉』

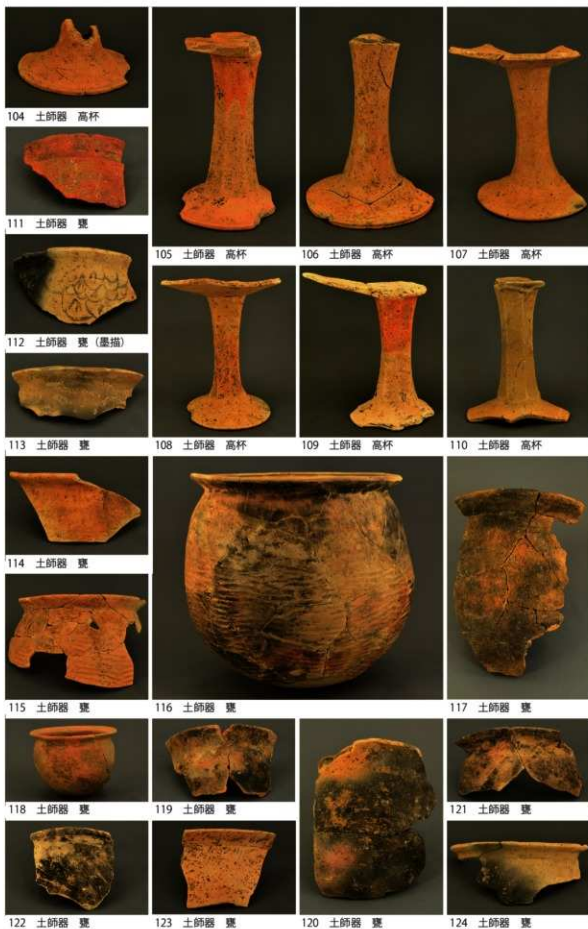
图版













125 土師器 甕



126 土師器 甕



127 土師器 甕



128 土師器 甕



129 土師器 甕



130 黑色土器 杯 A



131 黑色土器 杯 A



132 黑色土器 杯 A



133 黑色土器 杯 A



134 黑色土器 杯 A



135 黑色土器 杯 A



136 黑色土器 杯 A



137 黑色土器 碗 B



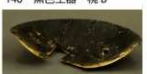
139 黑色土器 碗 B



140 黑色土器 碗 B



138 黑色土器 碗 B



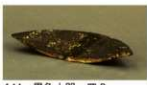
141 黑色土器 碗 B



142 黑色土器 碗 B



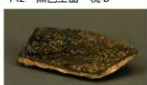
143 黑色土器 皿 B



144 黑色土器 皿 B



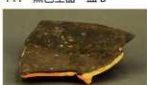
145 黑色土器 皿 B



146 黑色土器 皿 B



147 黑色土器 皿 B



148 黑色土器 皿 B



151 黑色土器 蓋



149 黑色土器 鉢



150 黑色土器 鉢



152 黑色土器 甕



153 黑色土器 甕



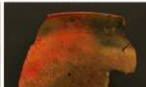
154 黑色土器 甕



155 黑色土器 甕



156 黑色土器 甕



158 黑色土器 甕



157 黑色土器 甕



160 黑色土器 甕



159 黑色土器 甕



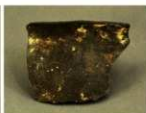
161 黑色土器 甕



162 黑色土器 甕



163 黑色土器 甕



164 黑色土器 甕



165 黑色土器 甕



166 黑色土器 甕



167 黑色土器 甕



168 黑色土器 甕



169 黑色土器 碗



170 黑色土器 碗



171 須惠器 杯 A



172 須惠器 杯 A



173 須惠器 杯 A



174 須惠器 杯 A



175 須惠器 杯 A



176 須惠器 杯 A



177 須惠器 杯 A



178 須惠器 杯 A



179 須惠器 杯 A



180 須惠器 杯 B 蓋



181 須惠器 杯B蓋

182 須惠器 杯B蓋

183 須惠器 杯B蓋

184 須惠器 杯B蓋



185 須惠器 杯B蓋

186 須惠器 杯B

187 須惠器 杯B

188 須惠器 杯B



189 須惠器 杯B

190 須惠器 鉢

191 須惠器 鉢



192 須惠器 鉢



194 須惠器 鉢

193 須惠器 鉢



195 須惠器 壺蓋



196 須惠器 壺蓋



199 須惠器 瓶



200 須惠器 瓶



197 須惠器 壺蓋

198 須惠器 瓶



201 須惠器 壺



202 須恵器 甕



203 須恵器 甕



204 須恵器 碗



205 須恵器 碗



206 須恵器 碗



207 緑釉陶器 蓋



207 ヘラ記号



209 緑釉陶器 碗



208 緑釉陶器 蓋



210 緑釉陶器 碗



211 緑釉陶器 碗



212 緑釉陶器 碗



213 緑釉陶器 碗



214 緑釉陶器 碗



215 緑釉陶器 碗



216 緑釉陶器 碗



217 緑釉陶器 碗



218 緑釉陶器 碗



219 緑釉陶器 碗



220 緑釉陶器 碗



221 緑釉陶器 碗



222 緑釉陶器 碗



224 緑釉陶器 碗



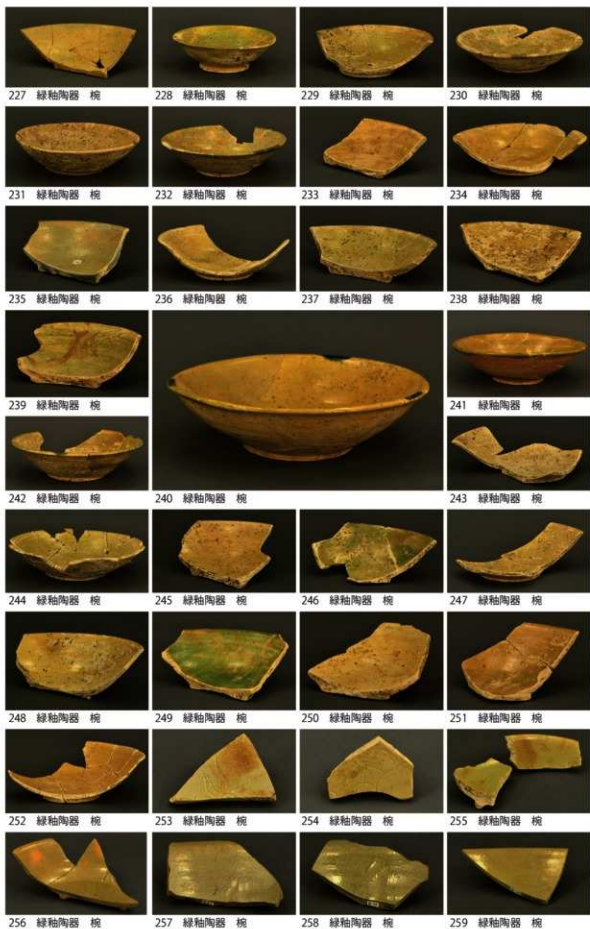
225 緑釉陶器 碗



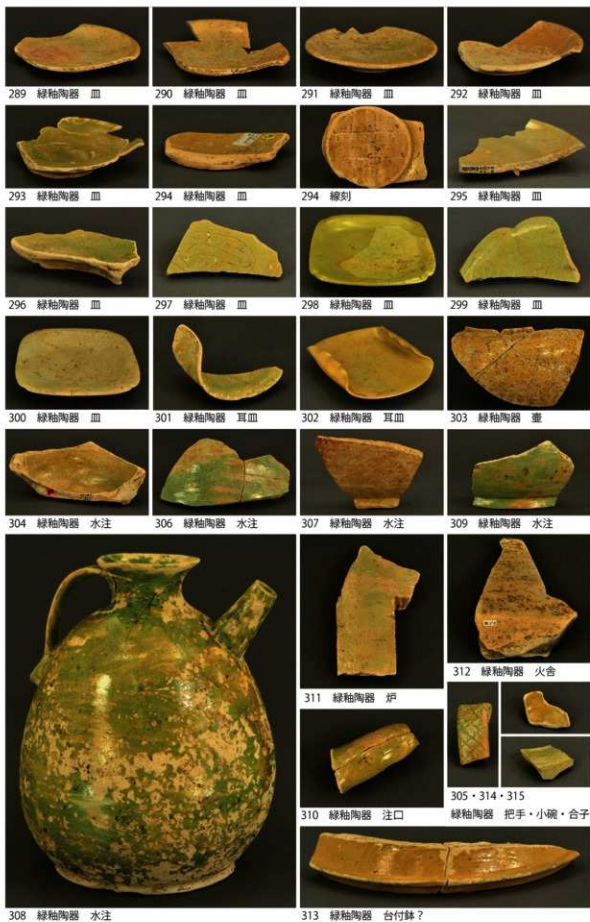
226 緑釉陶器 碗



223 緑釉陶器 碗









316 灰釉陶器 碗

317 灰釉陶器 碗

318 灰釉陶器 碗

319 灰釉陶器 碗



320 灰釉陶器 碗

321 灰釉陶器 碗

322 灰釉陶器 碗



323 灰釉陶器 皿

324 灰釉陶器 皿

322 灰釉陶器 碗



325 灰釉陶器 皿

327 灰釉陶器 皿



326 灰釉陶器 皿



328 灰釉陶器 蓋

329 灰釉陶器 蓋

330 灰釉陶器 壺



331 軒九瓦

332 軒九瓦

333 軒九瓦

334 軒九瓦



335 軒九瓦

336 軒九瓦

337 軒九瓦

338 軒九瓦



339 軒丸瓦



341 軒平瓦



342 軒平瓦



340 軒丸瓦



343 軒平瓦



344 軒平瓦



345 軒平瓦



346 軒平瓦



347 軒平瓦



349 軒平瓦



348 軒平瓦



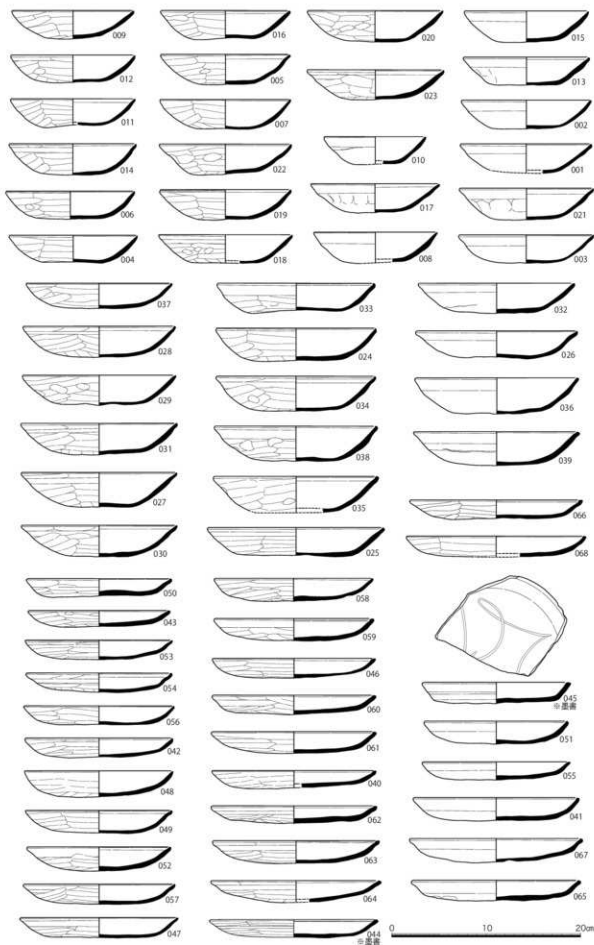
350 軒平瓦

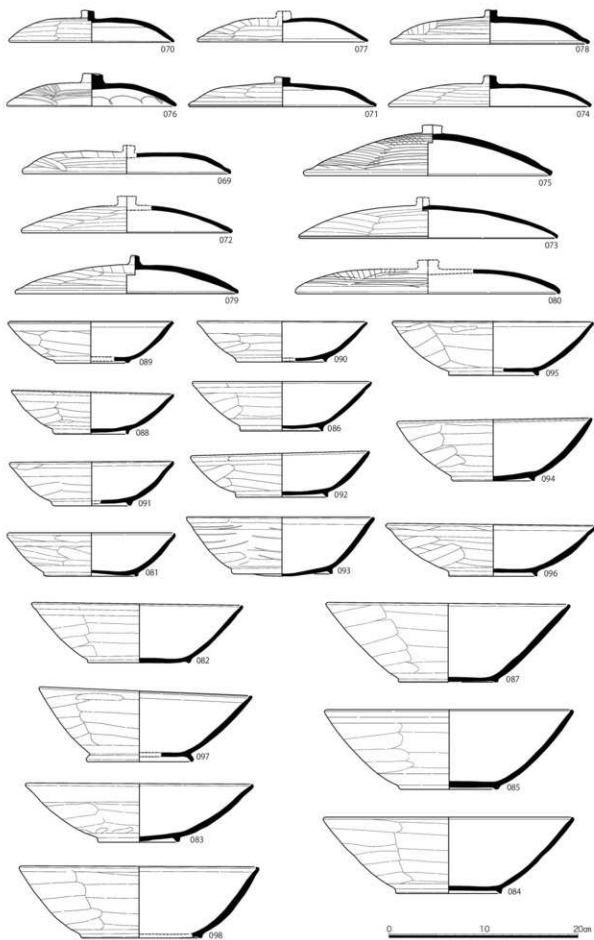


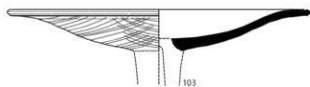
351 軒平瓦



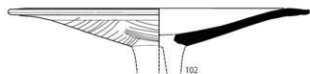
352 蛇尾







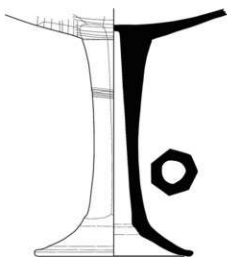
103



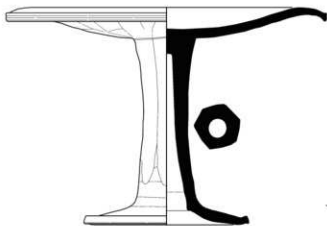
102



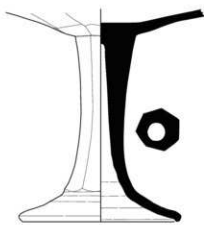
099



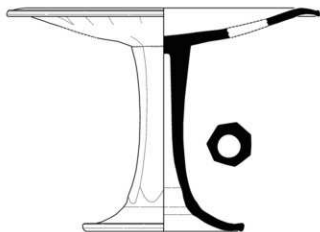
108



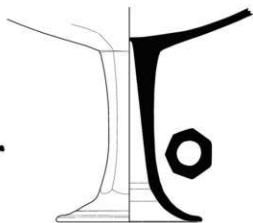
100



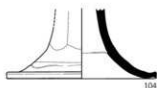
107



101

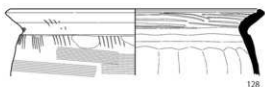
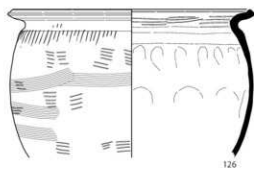
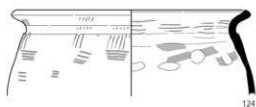
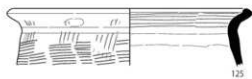
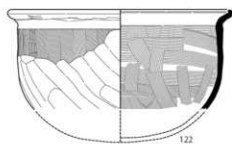
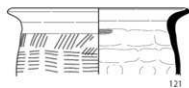
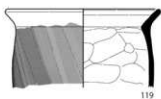
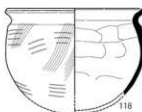
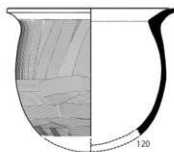
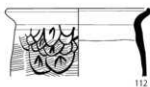
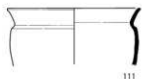
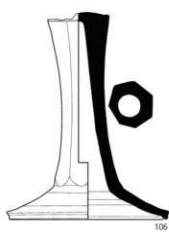
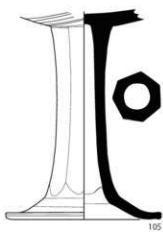
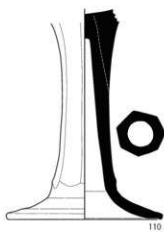


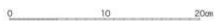
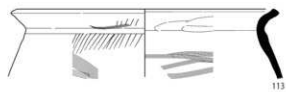
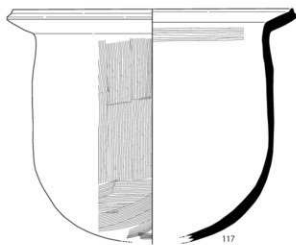
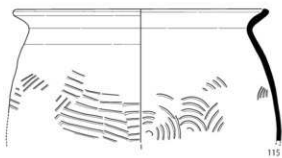
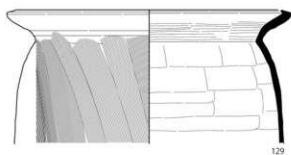
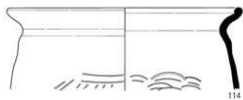
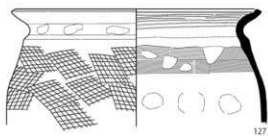
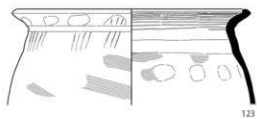
109

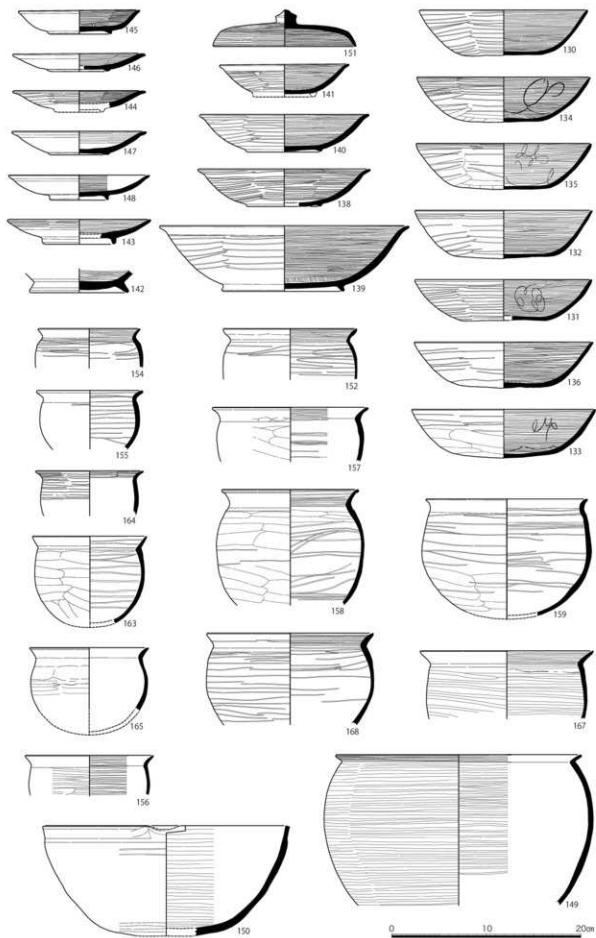


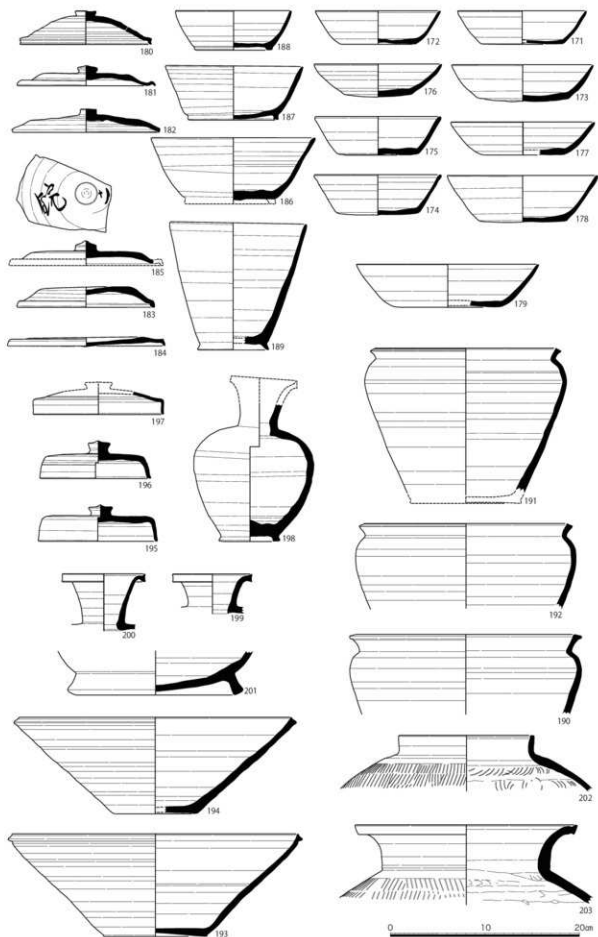
104

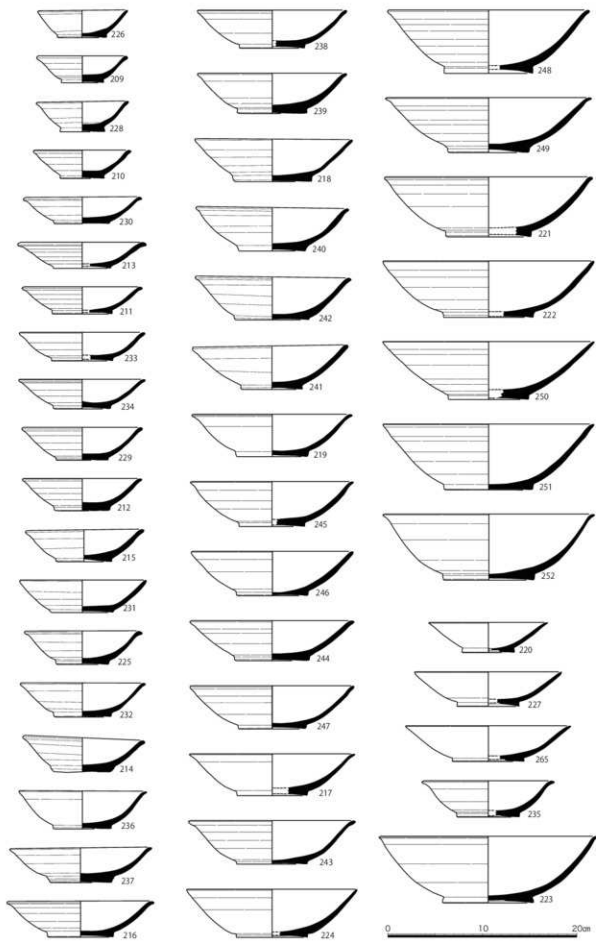


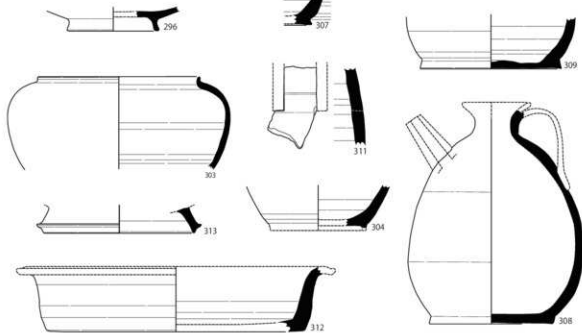
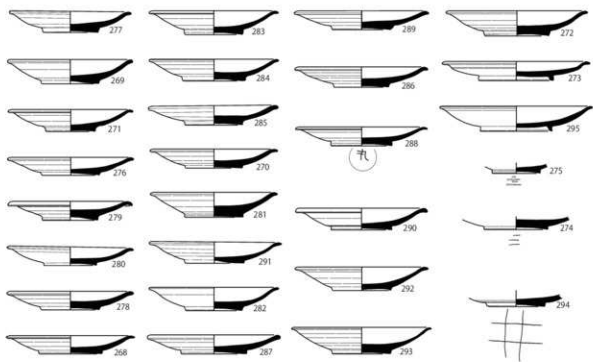


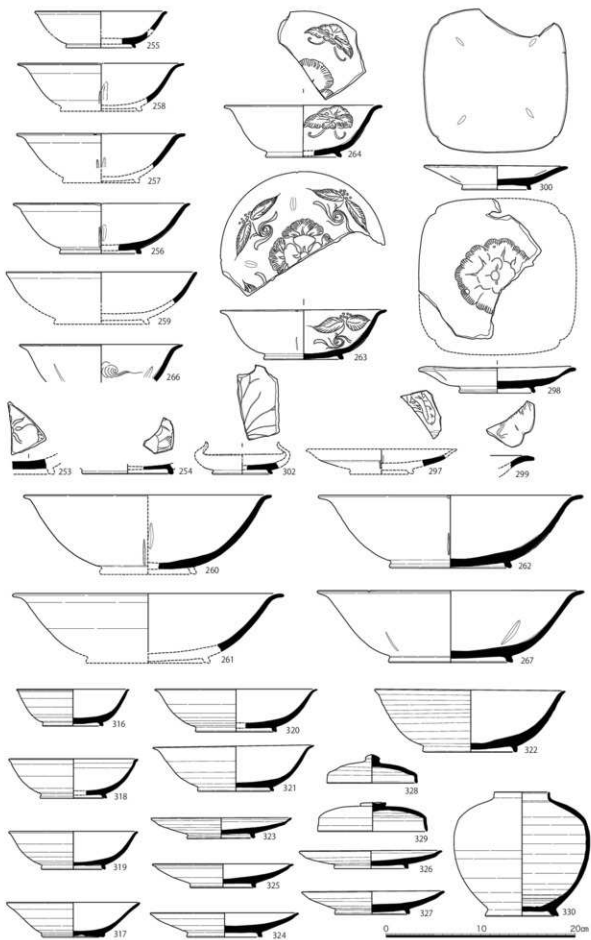


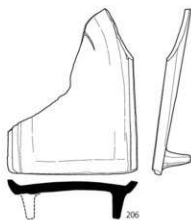
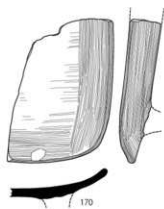
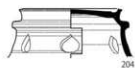




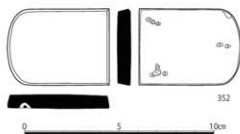


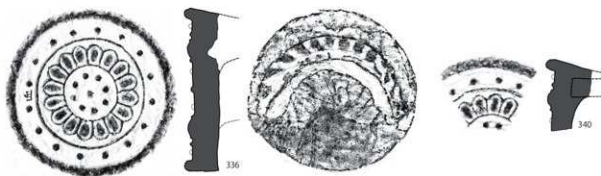
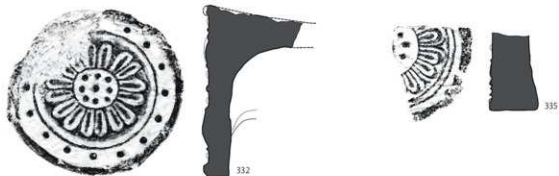
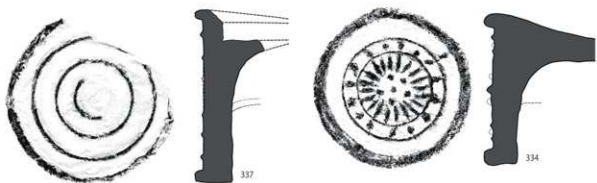






0 10 20cm





0 10 20cm



0 10 20cm

一覽表



表4 指定図解一覧表(1)

指定番号	種類	器形	口径	器高	高台径	産地	備考
1	土師器	椀A	14.0	3.1			
2	土師器	椀A	13.8	3.0			
3	土師器	椀A	14.3	3.0			
4	土師器	椀A	13.6	3.0			
5	土師器	椀A	13.8	3.2			
6	土師器	椀A	13.7	3.0			
7	土師器	椀A	13.9	3.2			
8	土師器	椀A	13.1	3.3			
9	土師器	椀A	13.0	3.0			
10	土師器	椀A	10.8	3.0			
11	土師器	椀A	13.3	3.0			
12	土師器	椀A	13.2	2.9			
13	土師器	椀A	13.4	3.0			
14	土師器	椀A	13.5	3.3			
15	土師器	椀A	13.2	3.3			
16	土師器	椀A	13.8	3.1			
17	土師器	椀A	13.7	3.1			
18	土師器	椀A	14.1	3.0			
19	土師器	椀A	14.0	3.2			
20	土師器	椀A	14.4	3.3			
21	土師器	椀A	14.3	3.4			
22	土師器	椀A	14.0	3.3			
23	土師器	椀A	14.5	3.2			
24	土師器	杯A	17.0	3.5			
25	土師器	杯A	18.8	3.1			
26	土師器	杯A	17.2	3.0			
27	土師器	杯A	16.5	3.7			
28	土師器	杯A	16.2	3.3			
29	土師器	杯A	16.3	3.2			
30	土師器	杯A	16.5	3.4			
31	土師器	杯A	16.6	3.3			
32	土師器	杯A	16.6	3.2			
33	土師器	杯A	16.8	3.2			
34	土師器	杯A	17.0	3.7			
35	土師器	杯A	17.5	3.8			
36	土師器	杯A	16.9	3.8			
37	土師器	杯A	15.5	2.7		皿か？	
38	土師器	杯A	17.3	3.7			
39	土師器	杯A	17.6	3.6			
40	土師器	皿A	17.4	1.9			
41	土師器	皿A	17.6	2.5			
42	土師器	皿A	15.7	2.1			
43	土師器	皿A	15.1	1.8			
44	土師器	皿A	17.9	1.8			
45	土師器	皿A	15.8	2.3		墨書内外面 墨書底部外面 河内産土師器	「西」
46	土師器	皿A	17.3	2.1			
47	土師器	皿A	16.8	2.2			
48	土師器	皿A	15.7	2.8			
49	土師器	皿A	15.6	2.5			
50	土師器	皿A	15.4	2.0			
51	土師器	皿A	15.3	2.5			
52	土師器	皿A	15.3	2.5			
53	土師器	皿A	15.6	2.1			
54	土師器	皿A	15.5	2.1			
55	土師器	皿A	15.7	2.0			
56	土師器	皿A	16.0	2.0			
57	土師器	皿A	16.1	2.1			
58	土師器	皿A	16.9	2.4			
59	土師器	皿A	17.0	2.4			
60	土師器	皿A	17.4	2.1			

表5 測定候補一覧表(2)

指定番号	種類	器形	口径	器高	高台径	産地	備考
61	土師器	皿A	17.5	2.3			
62	土師器	皿A	17.6	1.9			
63	土師器	皿A	17.7	2.4			
64	土師器	皿A	18.1	2.3			
65	土師器	皿A	18.0	2.2			
66	土師器	皿A	18.3	2.1			
67	土師器	皿A	18.4	2.5			
68	土師器	皿A	19.1	2.2			
69	土師器	杯B蓋	22.1	残3.0			
70	土師器	杯B蓋	17.5	3.4			
71	土師器	杯B蓋	20.0	3.2			
72	土師器	杯B蓋	22.4	2.9			
73	土師器	杯B蓋	27.5	残3.5			
74	土師器	杯B蓋	23.6	3.3			
75	土師器	杯B蓋	26.4	残4.5			
76	土師器	杯B蓋	18.0	3.5			
77	土師器	杯B蓋	18.1	残2.6			
78	土師器	杯B蓋	21.2	3.6			
79	土師器	杯B蓋	23.7	4.1			
80	土師器	杯B蓋	28.1	残2.6			
81	土師器	杯B	17.8	4.6	10.0		
82	土師器	杯B	22.4	6.4	11.0		
83	土師器	杯B	24.2	6.2	8.7		
84	土師器	杯B	26.6	8.1	11.3		
85	土師器	杯B	26.4	8.4	10.6		
86	土師器	杯B	19.0	5.2	8.8		
87	土師器	杯B	25.9	8.4	10.6		
88	土師器	杯B	17.2	4.7	8.0		
89	土師器	杯B	17.6	4.4	4.2		
90	土師器	杯B	18.1	4.4	9.8		
91	土師器	杯B	17.4	4.7	8.6		
92	土師器	杯B	19.0	4.8	9.8		
93	土師器	杯B	20.0	6.0	10.7		
94	土師器	杯B	20.7	6.7	8.9		
95	土師器	杯B	21.4	5.7	9.8		
96	土師器	杯B	22.2	5.6	9.4		
97	土師器	杯B	22.5	7.9	11.4		
98	土師器	杯B	25.4	7.6	12.4		
99	土師器	高杯	38.6	残3.8	—		
100	土師器	高杯	34.8	23.4	17.6		
101	土師器	高杯					
102	土師器	高杯	32.0	残4.2	—		
103	土師器	高杯	32.2	残4.4	—		
104	土師器	高杯	—	残7.4	15.9		
105	土師器	高杯	—	残22.2	16.5		
106	土師器	高杯	—	残21.9	17.2		
107	土師器	高杯	—	残22.5	17.3		
108	土師器	高杯	—	残26.2	16.9		
109	土師器	高杯	—	残22.6	15.6		
110	土師器	高杯	—	残22.2	16.6		
111	土師器	甕	14.1	残6.1			
112	土師器	甕	15.5	残7.2			
113	土師器	甕	28.2	残7.2			
114	土師器	甕	24.8	8.4			
115	土師器	甕	27.0	残14.0			
116	土師器	甕	25.6	25.5			
117	土師器	甕	30.8	残24.8			
118	土師器	甕	14.8	残9.3			
119	土師器	甕	16.6	残8.3			
120	土師器	甕	17.8	残13.6			

表6 数量検閲一覧表(3)

指定番号	種類	器形	口径	器高	高台径	産地	備考
121	土師器	甕	19.4	残 7.2			
122	土師器	甕	23.8	残 10.6			
123	土師器	甕	25.2	残 10.2			
124	土師器	甕	25.4	残 9.1			
125	土師器	甕	26.0	残 6.0			
126	土師器	甕	26.2	残 15.7			
127	土師器	甕	26.4	残 12.2			
128	土師器	甕	27.6	残 6.2			
129	土師器	甕	30.0	残 14.1			
130	黑色土器	杯 A	17.9	4.8			
131	黑色土器	杯 A	18.8	4.5			
132	黑色土器	杯 A	18.8	4.8			
133	黑色土器	杯 A					
134	黑色土器	杯 A	18.4	4.8			
135	黑色土器	杯 A	18.6	4.9			
136	黑色土器	杯 A	19.0	4.9			
137	黑色土器	碗 B	18.2	4.6			
138	黑色土器	碗 B	18.3	4.0	8.0		
139	黑色土器	碗 B	26.5	6.9			
140	黑色土器	碗 B	18.0	3.8	3.6		
141	黑色土器	碗 B	13.8	残 3.1	—		
142	黑色土器	碗 B		残 2.3	11.1		
143	黑色土器	皿 B	14.8	2.7	7.0		
144	黑色土器	皿 B	14.1	1.8	5.4		
145	黑色土器	皿 B	12.9	3.5	6.9		
146	黑色土器	皿 B	14.1	1.9	6.6		
147	黑色土器	皿 B	14.3	2.5	6.4		
148	黑色土器	皿 B	15.0	2.7	6.4		
149	黑色土器	鉢					
150	黑色土器	鉢					
151	黑色土器	蓋					
152	黑色土器	甕	14.8	残 5.2			
153	黑色土器	甕	13.0	残 6.4			
154	黑色土器	甕	11.2	残 4.1			
155	黑色土器	甕	11.1	残 6.1			
156	黑色土器	甕	13.0	残 4.4			
157	黑色土器	甕	16.3	残 5.6			
158	黑色土器	甕	15.0	残 11.8			
159	黑色土器	甕	17.2	残 11.9			
160	黑色土器	甕	17.8	7.7			
161	黑色土器	甕	18.7	残 6.9			
162	黑色土器	甕	14.0	残 2.9			
163	黑色土器	甕	12.1	残 9.3			
164	黑色土器	甕	11.4	残 4.8			
165	黑色土器	甕	12.6	9.3			
166	黑色土器	甕	14.2	残 3.6			
167	黑色土器	甕					
168	黑色土器	甕					
169	黑色土器	甕					
170	黑色土器	甕					
171	須恵器	杯 A	13.6	3.6	8.8		
172	須恵器	杯 A	13.2	3.5	8.2		
173	須恵器	杯 A	15.0	3.9	9.9		
174	須恵器	杯 A	13.5	4.3	8.8		
175	須恵器	杯 A	13.4	4.1	8.6		
176	須恵器	杯 A	13.5	3.5	7.2		
177	須恵器	杯 A	15.2	3.5	8.6		
178	須恵器	杯 A	16.0	5.0	9.4		
179	須恵器	杯 A	19.3	4.6	11.6		
180	須恵器	杯 B 蓋	14.0	3.6		猿投窟	

表7 測定候補一覧表(4)

指定番号	種類	器形	口径	器高	高台径	産地	備考
181	須恵器	杯B蓋		14.7	2.1		
182	須恵器	杯B蓋		15.7	2.5		
183	須恵器	杯B蓋		14.6	2.2		
184	須恵器	杯B蓋		1.0	16.7		
185	須恵器	杯B蓋	復元16.3	2.6			黒書「鏡」・「口」
186	須恵器	杯B		17.4	7.0	—	
187	須恵器	杯B		15.2	5.7	9.6	
188	須恵器	杯B		12.3	4.2	8.1	
189	須恵器	杯B		14.6	13.5	7.5	特殊な器形 播磨か?
190	須恵器	鉢		24.6	残8.5	—	
191	須恵器	鉢		20.2	残17.4	—	
192	須恵器	鉢		22.6	残9.1	—	
193	須恵器	鉢		31.2	10.8	11	
194	須恵器	鉢		29.9	10.1	9	底部糸切り
195	須恵器	壺蓋		12.6	3.8		底部糸切り
196	須恵器	壺蓋		11.7	4.0		
197	須恵器	壺蓋		13.7	2.9		
198	須恵器	壺					
199	須恵器	壺		8.4	4.2		
200	須恵器	壺		8.8	6.0		
201	須恵器	壺		18.6	4.7		
202	須恵器	甕		14.8	残5.9		
203	須恵器	甕		23.6	残8.3		
204	須恵器	甕(門面甕)		12.4	残5.1		
205	須恵器	甕(風字甕)					
206	須恵器	甕(風字甕)					
207	緑釉陶器	蓋		23.6	4.7		轆枝窯 内面へラ記号「ニ」
208	緑釉陶器	杓蓋		23.6	残3.0		
209	緑釉陶器	椀		9.6	2.9	4.6	轆枝窯 小椀
210	緑釉陶器	椀		10.3	3.0	3.5	轆枝窯
211	緑釉陶器	椀		12.8	2.9	6.3	轆枝窯
212	緑釉陶器	椀		12.6	3.4	5.9	轆枝窯
213	緑釉陶器	椀		13.6	2.8	6.2	轆枝窯
214	緑釉陶器	椀		13.0	3.9	6.2	轆枝窯
215	緑釉陶器	椀		12.6	3.5	6.0	轆枝窯
216	緑釉陶器	椀		15.6	3.8	7.0	轆枝窯
217	緑釉陶器	椀		17.5	4.4	7.4	轆枝窯
218	緑釉陶器	椀		16.7	4.5	8.4	轆枝窯
219	緑釉陶器	椀		17.0	4.5	7.8	轆枝窯
220	緑釉陶器	椀		12.6	3.2	5.6	轆枝窯
221	緑釉陶器	椀		22.1	6.4	9.0	轆枝窯
222	緑釉陶器	椀		22.4	6.0	9.4	轆枝窯
223	緑釉陶器	椀		23.1	7.0	9.7	轆枝窯
224	緑釉陶器	椀		18.0	5.1	7.5	轆枝窯
225	緑釉陶器	椀		12.5	3.6	5.6	轆枝窯
226	緑釉陶器	椀		9.5	2.9	5.2	轆枝窯
227	緑釉陶器	椀		15.6	3.6	6.6	轆枝窯
228	緑釉陶器	椀		9.9	3.2	4.8	轆枝窯
229	緑釉陶器	椀		12.8	3.5	5.5	轆枝窯
230	緑釉陶器	椀		12.6	2.8	5.9	轆枝窯
231	緑釉陶器	椀		13.5	3.5	6.8	轆枝窯
232	緑釉陶器	椀		13.3	3.6	6.0	轆枝窯
233	緑釉陶器	椀		13.3	3.0	6.4	轆枝窯
234	緑釉陶器	椀		13.4	3.2	6.1	轆枝窯
235	緑釉陶器	椀		14.0	3.9	6.6	轆枝窯
236	緑釉陶器	椀		13.6	4.0	6.2	轆枝窯
237	緑釉陶器	椀		15.1	3.7	6.5	轆枝窯
238	緑釉陶器	椀		15.8	4.0	6.9	轆枝窯
239	緑釉陶器	椀		15.8	4.3	7.3	轆枝窯

表5 数量目録一覧表(5)

指定番号	種類	器形	口径	器高	高台径	産地	備考
240	緑釉陶器	椀	16.2	4.7	7.1	幡枝窯	
241	緑釉陶器	椀	16.5	4.7	6.5	幡枝窯	
242	緑釉陶器	椀	16.5	4.6	7.8	幡枝窯	
243	緑釉陶器	椀	17.7	4.6	7.4	幡枝窯	
244	緑釉陶器	椀	17.4	4.3	7.9	幡枝窯	
245	緑釉陶器	椀	17.3	4.7	7.0	幡枝窯	
246	緑釉陶器	椀	17.2	4.7	7.5	幡枝窯	
247	緑釉陶器	椀	17.4	4.6	7.2	幡枝窯	
248	緑釉陶器	椀	21.4	6.6	9.4	幡枝窯	
249	緑釉陶器	椀	21.8	5.9	8.6	幡枝窯	
250	緑釉陶器	椀	22.4	6.2	8.6	幡枝窯	
251	緑釉陶器	椀	22.4	6.9	9.5	幡枝窯	
252	緑釉陶器	椀	22.4	7.0	9.6	幡枝窯	
253	緑釉陶器	椀	—	—	—	猿投窯	陰刻花文
254	緑釉陶器	椀	—	残1.0	9.7	猿投窯	陰刻花文
255	緑釉陶器	椀	14.0	復元3.9	7.4	猿投窯	
256	緑釉陶器	椀	18.7	5.2	8.6	猿投窯	
257	緑釉陶器	椀	17.0	残3.6	—	猿投窯	
258	緑釉陶器	椀	17.6	残4.1	—	猿投窯	
259	緑釉陶器	椀	20.2	残3.3	—	猿投窯	
260	緑釉陶器	椀	26.7	残7.8	—	猿投窯	
261	緑釉陶器	椀	28.7	残6.2	—	猿投窯	
262	緑釉陶器	椀	28.0	7.7	15.9	猿投窯	大碗
263	緑釉陶器	椀	17.6	5.3	8.4	猿投窯	陰刻花文
264	緑釉陶器	椀	16.8	5.5	8.0	猿投窯	陰刻花文
265	緑釉陶器	椀	17.5	3.8	7.7	猿投窯	
266	緑釉陶器	椀	17.4	残4.0	—	猿投窯	陰刻花文
267	緑釉陶器	椀	28.4	7.7	12.3	猿投窯	猿投 大碗
268	緑釉陶器	皿	13.6	2.0	6.6	幡枝窯	
269	緑釉陶器	皿	13.3	2.5	6.0	幡枝窯	
270	緑釉陶器	皿	13.5	2.0	5.9	幡枝窯	
271	緑釉陶器	皿	13.2	2.3	5.3	幡枝窯	
272	緑釉陶器	皿	15.0	2.6	6.5	幡枝窯	
273	緑釉陶器	皿	15.7	2.0	8.0	幡枝窯	
274	緑釉陶器	皿	—	1.4	6.6	幡枝窯	底部外面に線刻「三」
275	緑釉陶器	皿	—	1.0	5.2	幡枝窯	底部外面に線刻「三」
276	緑釉陶器	皿	13.4	1.9	6.0	幡枝窯	
277	緑釉陶器	皿	13.0	2.3	5.9	幡枝窯	
278	緑釉陶器	皿	13.4	2.0	6.2	幡枝窯	
279	緑釉陶器	皿	13.2	2.0	5.9	幡枝窯	
280	緑釉陶器	皿	13.5	2.1	5.6	幡枝窯	
281	緑釉陶器	皿	13.5	2.6	6.1	幡枝窯	
282	緑釉陶器	皿	13.7	2.5	6.0	幡枝窯	
283	緑釉陶器	皿	13.7	2.5	6.1	幡枝窯	
284	緑釉陶器	皿	13.8	2.3	6.5	幡枝窯	
285	緑釉陶器	皿	13.7	2.1	6.2	幡枝窯	
286	緑釉陶器	皿	14.1	2.2	5.7	幡枝窯	
287	緑釉陶器	皿	14.1	2.1	7.0	幡枝窯	
288	緑釉陶器	皿	2.1	14.0	6.4	幡枝窯	底部外面 線刻「丸」
289	緑釉陶器	皿	2.0	14.3	6.3	幡枝窯	
290	緑釉陶器	皿	14.0	2.3	6.5	幡枝窯	
291	緑釉陶器	皿	14.1	2.3	6.4	幡枝窯	
292	緑釉陶器	皿	14.1	2.5	6.4	幡枝窯	
293	緑釉陶器	皿	14.8	2.8	6.2	幡枝窯	
294	緑釉陶器	皿	—	1.3	6.4	幡枝窯	底部外面線刻
295	緑釉陶器	皿	16.2	2.9	7.4	猿投窯	
296	緑釉陶器	皿	—	残2.6	9.8	幡枝窯	台付
297	緑釉陶器	皿	—	—	—	猿投窯	陰刻花文
298	緑釉陶器	角皿	16.7	2.8	8.0	猿投窯	陰刻花文 猿投 方形 四隅切り欠く

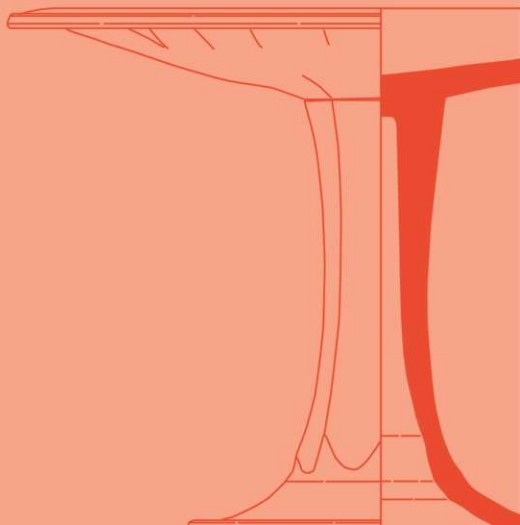
表9 指定陶器一覧表(6)

指定番号	種類	器形	口径	器高	高台径	産地	備考
299	緑釉陶器	角皿	—	—	—	猿投窯	陰刻花文
300	緑釉陶器	角皿	15.4	2.7	7.5	猿投窯	
301	緑釉陶器	耳皿	—	残 2.0	—	轆枝窯	
302	緑釉陶器	耳皿	—	残 1.3	6.5	猿投窯	陰刻花文 猿投
303	緑釉陶器	壺	17.2	残 9.6	—	轆枝窯	
304	緑釉陶器	壺	—	残 4.8	復元 11.0	轆枝窯	
305	緑釉陶器	水注	—	—	—	轆枝窯	把手
306	緑釉陶器	壺	—	—	—	轆枝窯	
307	緑釉陶器	壺	—	—	—	轆枝窯	
308	緑釉陶器	水注	復 7.2	23.4	13.3	轆枝窯	
309	緑釉陶器	水注	—	—	—	轆枝窯	
310	緑釉陶器	水注	1.2	残長 5.5	—	轆枝窯	注口のみ
311	緑釉陶器	炉	—	—	—	轆枝窯	炉
312	緑釉陶器	火舎	—	—	—	轆枝窯	火舎
313	緑釉陶器	台付鉢	—	—	—	轆枝窯	脚台のみ
314	緑釉陶器	その他	4.4	1.3	—	轆枝窯	ミニチュア
315	緑釉陶器	合子	5.6	残 1.0	—	猿投窯	
316	灰釉陶器	椀	11.9	3.9	6.5	猿投窯	
317	灰釉陶器	椀	14.1	3.7	6.8	猿投窯	
318	灰釉陶器	椀	13.7	4.2	7.0	猿投窯	
319	灰釉陶器	椀	13.6	4.0	6.8	猿投窯	
320	灰釉陶器	椀	17.2	4.5	8.6	猿投窯	
321	灰釉陶器	椀	17.0	4.9	8.1	猿投窯	
322	灰釉陶器	椀	20.2	6.7	9.8	猿投窯	
323	灰釉陶器	皿	14.8	2.2	7.3	猿投窯	
324	灰釉陶器	皿	15.8	2.6	8.0	猿投窯	
325	灰釉陶器	皿	14.7	2.5	7.0	猿投窯	
326	灰釉陶器	皿	15.1	2.0	7.9	猿投窯	
327	灰釉陶器	皿	15.1	2.5	8.0	猿投窯	
328	灰釉陶器	壺蓋	9.6	3.0	—	猿投窯	
329	灰釉陶器	壺蓋	11.6	3.1	—	猿投窯	
330	灰釉陶器	壺 A	5.7	13.1	7.8	猿投窯	

表10 指定陶器一覧表(7)

指定番号	種類	器形	瓦当径(幅)	瓦当長	残長	産地	備考
331	瓦	軒丸瓦	15.5	—	—		「近」銘
332	瓦	軒丸瓦	18.1	—	—		
333	瓦	軒丸瓦	14.5	—	—		
334	瓦	軒丸瓦	15.6	—	—		
335	瓦	軒丸瓦	—	—	7.7		
336	瓦	軒丸瓦	17.1	—	—		「近」銘
337	瓦	軒丸瓦	17.8	—	—		
338	瓦	軒丸瓦	—	—	8.9	上ノ庄田	
339	瓦	軒丸瓦	—	—	6.7	上ノ庄田?	
340	瓦	軒丸瓦	—	—	7.5		
341	瓦	軒平瓦	5.9	—	13.2		
342	瓦	軒平瓦	5.6	—	10.1	芝本?	
343	瓦	軒平瓦	残 3.2	—	9.0		
344	瓦	軒平瓦	残 4.1	—	11	西賀茂	
345	瓦	軒平瓦	6.3	—	8.6	芝本	
346	瓦	軒平瓦	6.5	—	14.8	芝本?	
347	瓦	軒平瓦	7.1	—	5.6	吉志部	
348	瓦	軒平瓦	6.7	27.7	—	西賀茂?	
349	瓦	軒平瓦	6.6	—	14.5		
350	瓦	軒平瓦	4.5	—	8.2	上ノ庄田	
351	瓦	軒平瓦	4.9	23.5	—	上ノ庄田?	
352	石製鈔具	鉈尾	幅 4.0	長 5.4	厚 0.8		

附 編



はじめに

今回、指定品候補選定にあたって冷然院北内溝3箇所分の出土遺物すべてを対象にした再調査を行った。東西約60メートルの区間から出土した土器類の総量は破片数にして111,866片の多数にのぼる(表2 前掲9頁)。

この土器群は嵯峨天皇(太上天皇)の離宮および御所であった「冷然院」の遺物という特殊性もさることながら、溝内に堆積した土層の状況からみて短期間のうちに投棄されたことが確認でき、しかもその後ほとんど手つかずの状態に残されていたという、考古資料としてきわめて恵まれた条件のもとに発見された遺物群である。平安京の発掘調査では、このように遺跡の性格・時期が判明し、しかも遺存状態が良好な一括性の高い資料が出土することは多くなく、その点からみてもこの資料群の持つ意義は大きい。以下では今回の再調査の結果判明した事柄とそれから派生するいくつかの問題について述べることにしたい。

1 土器群の時期

この土器群が属する時期は平安京の土器編年観に従えばI期新に位置づけられる。暦年代にすれば810年～840年頃と推定している段階で、平安遷都直後の奈良時代的な要素を多分に残す土器様相から平安京的な土器様相へ移行して行く時期に相当する¹⁾。

このI期新段階については近年の資料の増加によりさらに細分が可能な条件が整いつつあり、その前段階であるI期中の終末に近い土器群および次段階のII期古を含めた具体例を順に挙げると、

- 1 平安宮左兵衛府・侍従所 SD4 および SD59 (I期中最新相)²⁾
- 2 平安宮中務省 SK201 (I期新最古相)³⁾
- 3 平安京右京三条三坊五町 SD19(I期新の典型)⁴⁾

4 冷然院北内溝(本資料I期新の新相)⁵⁾5 嵐山苑池(II期古最古相)⁶⁾

という流れが想定できる(図5)。

1は左兵衛府と侍従所間の道路西寄りに南北方向に掘られた溝状の土坑から出土した土器群である。共存した土師器杯片の墨書「主馬」から大同3年(808)に主馬寮が左馬寮に改称された時期以前の年代に属するものと考えられる。

2は中務省の西部、右舎人との境界付近で検出された土坑出土土器群である。型的には1に近いものがあるが、ヘラケズリ調整の粗さや口径・器高の減少傾向がみえ、また猿投窯産の緑釉陶器が共存するなど明らかに後出的要素を含む資料である。

『日本後紀』弘仁6年正月5日条「造甕器生尾張国山田郡人三人家部乙麻呂等三人傳習成業。准維生聽出身。」が尾張に於ける緑釉陶器生産の開始に関連する記事であることは明らかであり⁷⁾、この土器群に共存した緑釉陶器が猿投窯産としては古相を示すことから弘仁6年(815)以降のそれに近い年代が想定できる。またこの土器群には灰軸陶器は含まれていない。

3は右京三条三坊五町の北限に沿って検出された幅約12mの東西方向の溝から出土したものである。溝の南側に沿って東西方向の建物が2棟並び、遺物は建物付近に集中していた。その後の調査で同町南部に大規模な建物が2棟確認され、この遺跡は少なくとも1町を占める邸宅跡であることが確認された⁸⁾。土器群の特徴は2に比べてやや新相を示し、緑釉陶器・灰軸陶器が多数含まれている。特に猿投窯産緑釉陶器の出土量は冷然院に匹敵するほどである。

4は当該の冷然院北内溝資料である。椀・杯・皿など土師器の食器類の法量分布は3とほとんど共通するが、外面のヘラケズリがない個体の

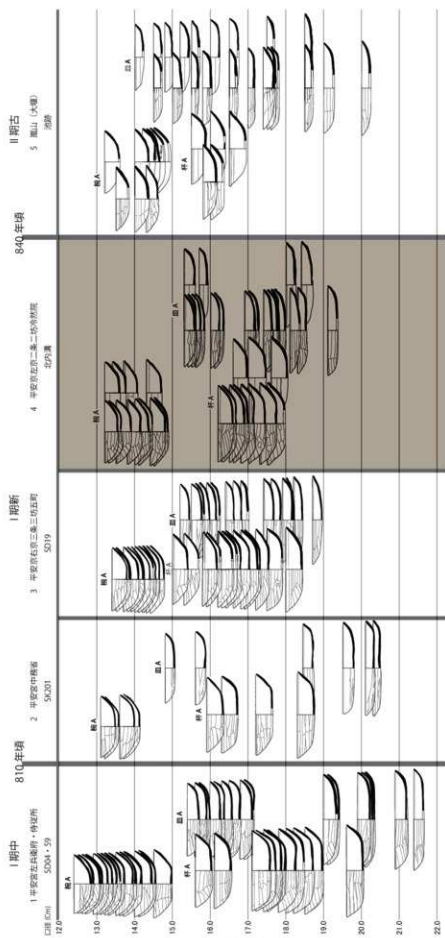


図5. 9世紀の土師器食器類の変化

比率がかなり高いこと、灰軸陶器に3にはないハケ塗り施軸のものが僅かではあるが含まれている点などを考慮すると、3よりやや新しい年代を与えることができる。

5は嵐山大堰川北岸で検出された庭園遺構の一部と思われる池跡からの資料である。土師器食器類には外面のハケズリを残すものもあるが、数量的にはハケズリがない個体が多く、形態的にもII期の特徴が現れている。緑軸陶器の比率が非常に高い土器群である。類似した特徴を持つ資料としては嵯峨院（史跡大覚寺御所跡）SD43がある³⁾。同資料は共伴した「供御」の黒書土器から嵯峨上皇が嵯峨院に遷御した承和元年(834)から同院で没した承和9年(842)頃に比定されるが、嵐山資料とともに冷然院北内溝資料には無いやや新しい特徴をもつ緑軸陶器などから840年前後頃の年代が想定できる。

上に掲げた組別は土師器の型式的特徴・分量分布傾向・共伴する須恵器・黒色土器・施軸陶器の型式的特徴などをともに組立てているが、これに基づけば冷然院北内溝出土の土器群はI

期新の後半段階に比定できる特徴を示している。この見解に従えば、冷然院北内溝土器群が投棄されたのはI期新の後半、830～840年頃と想定され、嵯峨上皇の嵯峨院遷御を契機に一括投棄されたものと捉えてもあながち否定できないものと考えられる。さらに想像をたくましくすれば『続日本後紀』承和元年8月条に「上為先太上天皇及太皇太后。置酒於冷然院。上自奉玉卮。伶官奏樂。令源氏兒童舞于殿上。極歡而罷。以綿一萬屯賜五位已上并院司祿各有差。太上天皇及太皇太后將遷御嵯峨新院。故有此譔設也。」と記される、嵯峨上皇と太皇太后が嵯峨院へと遷御するに際して催された冷然院での饗宴で使用された器物そのものが含まれている可能性すら想起される。

2 冷然院北内溝土器群の特徴

つぎに冷然院北内溝土器群と平安京内および周辺の遺跡から出土した同時期（I期新）に属する土器群との比較を通して、この北内溝資料のもつ特質を明らかにしたい。なお、ここでは

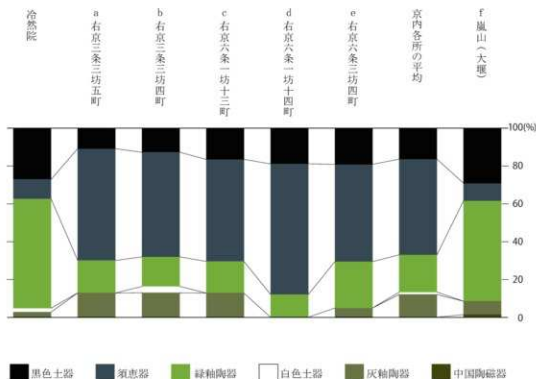


図6. 土師器を除く小型食膳具比率の比較 (破片数)

いずれの土器群に於いても圧倒的多数（70～90%以上）を占める土師器を除いた食器類について検討することにした。比較対象とした遺跡は、a 右京三条三坊五町¹⁰⁰・b 右京三条三坊四町¹⁰¹・c 右京六条一坊十三町¹⁰²・d 右京六条一坊十四町¹⁰³・e 右京六条三坊四町¹⁰⁴・f 嵐山（大堰）¹⁰⁵の6箇所である（図6）。

京内各遺跡での比率やその平均値からみてもこの段階ではまだ須恵器が土師器を除いた食器類の中では最上位を占めていることがわかるが、多くの事例で緑軸陶器がそれに次ぐ位置にあることは注目すべき点である。灰軸陶器は黒色土器と同程度かやや少ない事例が多い。特にd 右京六条一坊十四町では灰軸陶器が全くカウントされていないが、これはこの資料が先述した2中務省SK201に近い段階に属し、灰軸陶器がまだ生産されていないか生産はされていても広く普及していない時期のものであるからかも知れない。いずれにせよ京内の1期新段階の資料を見ると土師器以外の食器類では須恵器が主体で、緑軸陶器は2割程度あるいはそれ以下という事例が一般的である。

これら京内の各資料と比較すれば、冷然院では緑軸陶器が6割近くを占める突出的な比率を示し、さらに黒色土器の比率も京内平均の倍近くの比率を示す。また、従来の無高台の杯に加え緑軸陶器に近似する細い輪高台を持ち口縁端部が外反する形態の器が多く含まれているのが特徴的である。このような特異な器種構成や多量の土器類が短期的に投棄された出土状況などを考慮すれば、この遺物群は日常的に消費されたものではなく、冷然院で催された饗宴などに供された器物が一括して投棄された可能性が高い。大型の土師器杯Bや高杯が多数存在することもその傍証といえるだろう。

この冷然院資料とよく似た比率を示すのが6嵐山（大堰）の資料である。ここでは苑池跡から多量の土器類が一括投棄された状態で出土しており、出土状況も冷然院北内溝と類似する。

土器類の内容は灰軸陶器がやや多いほかは冷然院に酷似しており、嵯峨院SD43資料とも共通する要素もある。

『日本後紀』弘仁3年6月24日条に「幸於大堰。山城国獻物。賜五位以上衣被。」とあり、その後も嵯峨天皇の大堰への行幸記録が散見できる。ここに記される「大堰」の正確な位置や範囲はかならずしも明らかではないが、あるいは嵐山（大堰）資料出土地点付近に嵯峨天皇に関連する施設があった可能性を示唆するものかもしれない。

3 冷然院北内溝出土緑軸陶器の生産地

前節での土器比率の検討から、冷然院では他の京内遺跡に比べ数倍の量の緑軸陶器が使用されていることが明らかになった。冷然院で催された饗宴での食器構成に緑軸陶器が重要な位置を占めていたことが窺える。

出土した緑軸陶器には山城産と尾張産の2種がある。この時期の山城産の緑軸陶器は洛北幡枝窯（京都市左京区岩倉幡枝町）で生産されていたことが確認されている¹⁰⁶。同窯跡では平安宮所用瓦を生産していた史跡栗栖野瓦窯跡をはじめとして多数の窯跡が発見されているが、瓦窯周辺に二彩・緑軸単彩陶器さらに冷然院やその他の平安京内の遺跡から出土する緑軸陶器を焼成した窯跡が存在する。栗栖野瓦窯跡近傍には奈良時代の瓦窯跡もあり、この地域で平安遷都以前から窯業生産が行われていたことは明らかであるが、平安京造営を契機として生産活動が拡大し、施軸陶器生産も始まったようである。この地で生産された瓦は同じく平安宮所用瓦生産を担った西賀茂瓦窯群の瓦とともに平安宮から多量に出土している。

一方、陶器部門については、当初は奈良時代以来の多彩釉や羽釜・炬など特殊な緑軸単彩陶器が生産されていたがその量はさほど多くない。しかし1期新に椀・皿類を主体とする緑軸陶器生産が始まると生産量は飛躍的に増加

し、平安京へ多量に供給されるようになる。山城の緑釉陶器生産は拡大を続け、栗栖野瓦窯跡北西部にあたる本山や木野地区さらには洛西の石作・小塩地区へと展開して行くが、それは今回の冷然院資料の属する時期より後のこととなる。

尾張産での緑釉陶器生産は猿投窯（愛知県名古屋市長久手町・日進市・東郷町・豊明市・みよし市・刈谷市・豊田市など）で開始された。猿投窯に於けるこの段階の窯跡としてはK(黒笹)14号窯（東郷町）が知られているが、ここでは施釉された製品は出土していない¹⁷⁾。猿投窯で9世紀前半に緑釉陶器を生産していた窯跡としては鳴海地区（名古屋市長久手町・緑区など）の亀ヶ洞窯・熊ノ前窯（ともに緑区）があり、施釉された陶片や釉薬の調整に使用された坩堝などが多量に出土している。ただしこの2箇所の窯跡で出土した緑釉陶器は冷然院のものに比べ後出的なものが主体であり、残念なことに初期段階の緑釉陶器生産窯は未発見である。しかし、近接するNN（鳴海）265号窯や同NN279号窯では初期段階に位置づけられる碗や手付き瓶の素地が出土しており、付近に施釉窯が存在していた可能性はきわめて高い。特にNN265窯の素地碗はI期新最古相に位置づけられる平安宮中務省SK201出土の緑釉陶器碗と近似しており、近い時期の遺物と思われる¹⁸⁾（図7）。

これら2箇所の生産地から冷然院にもたらされた緑釉陶器を量的な側面からみると、山城

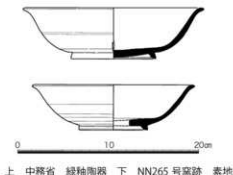


図7. 中務省とNN265号窯 出土碗

産が圧倒的多数を占めており、尾張産は緑釉陶器全体の約5%程度である。しかし、山城産緑釉陶器には釉層が薄く塗り斑が目立つものやヘラミガキ調整の粗雑な製品が多数あるのに対して、尾張産緑釉陶器は丁寧に成形・調整され釉層も厚く均一な精製品ばかりであり、品質面では明らかな差異を見いだせる。精緻な陰刻花紋を持つ製品や、方形に加工した皿がある等、山城産とは異なる規範のもとに生産されたものであることは明らかである。

このような初期段階の猿投窯産緑釉陶器がまとまって出土する事例は意外に少なく、冷然院以外に平安京内では淨和院や右京三条三坊、京外では榎原遺跡が知られているにすぎない。他地点からの出土事例が全くないわけではないが、点数は散発的で上記の遺跡ほどのまとまりはない。

こうした出土状況はこの段階の猿投窯産緑釉陶器の生産量がまだ限定的で、供給されていた場所も限られていたことを示すものであろう（図8）。

この観点からみれば冷然院北内溝資料に含まれている初期猿投窯産緑釉陶器の量は他を凌駕しており、調査範囲が院北端の一部に留まっていることを考え合わせるならば、相当量の猿投窯産緑釉陶器が冷然院に供給されていたことが推測され、初期猿投窯産緑釉陶器が嵯峨天皇・上皇期の冷然院を特徴付ける遺物のひとつであるといっても過言ではないだろう。

4 猿投窯産緑釉陶器について

では何故に冷然院において猿投窯産の緑釉陶器が必要とされたのだろうか。単に緑釉陶器ということであれば先述したごとく平安京北郊の幡枝窯で多量に生産されており、現に出土量では猿投窯産を遙かに凌いでいる。しかしこれも先述したとおり品質面では両者の間には大きな差異があり、それは見た目の質感の違いとして明瞭に現れている。

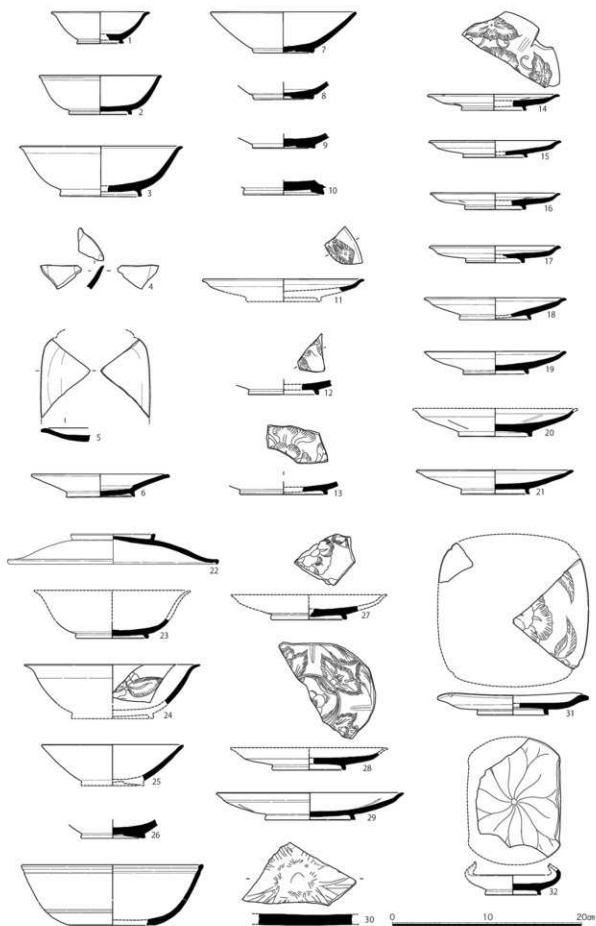


图8. 他遺跡出土初期筑投窯産緑釉陶器 1~21 右京三条三坊五町・22~32 櫻原遺跡



越州窯青磁碗・故宮博物院（北京）蔵



瓠窰青釉划花菱角方碗 『温州古陶瓷』より



瓠窰青釉玉璧底碗 『温州古陶瓷』より

図9. 初期猿投窯産緑釉陶器に類似する唐代青磁

幡枝窯産緑釉陶器の質感についてみると、従前の三彩陶器や緑釉単彩陶器と共通あるいはやや劣化した印象を受ける製品が主体をなすのに対して、猿投窯の製品は器表面に丁寧なヘラミガキを施して平滑に仕上げ、堅緻に焼成された素地の全面に厚く均一に施釉された上薬によって従来の国産鉛釉陶器にはない光沢が生じており、あたかも青磁と見紛うばかりの仕上がりである。形態的にも唐の青磁を忠実に模倣した製品も多い（図9）。嵯峨天皇やその周辺が唐風の文化を嗜好したことはよく知られており、宴席において使用する器に対しても唐の青磁等に範を求めたことは想像に難くない。

こうした動向に関する史料として『日本後紀』弘仁4年（813）9月24日条に「宴皇太弟於清涼殿。具物用漢法。」

という記事がある。これはこの9日前に嵯峨天皇が皇太弟（淳和）の南池（淳和院）に行幸し催した詩宴に対する答礼に皇太弟が内裏清涼殿において奉獻した饗宴に関する記載であるが、「漢法の宴」の例としてはこれより先に桓武天皇が唐に赴く直前の遣唐大使葛野麻呂等のためにひらいた酒宴がある。（『日本後紀』延暦22年（803）3月29日。「遣唐大使葛野麻呂、副使石川道益賜餞。宴設之事、一依漢法。」

一見類似した内容の記事ではあるが、「漢法」に関わる部分で後者では「宴設之事、一依漢法」と全体的な表現がとられているのに対して、前者では「具物用漢法。」（傍点筆者）とより具体的な表現となっている。おそらくこの時点ではまだ点数は多くないとはいえ、唐からもたらされた青磁や白磁が一部で使用されていた可能性は高い。そしてこのような唐風の酒宴や詩宴の頻度が増加するに伴い唐の器物が希求され、その不足分を補う形で国産の「青磁に類した焼き物」が求められたことが猿投窯に緑釉陶器生産が導入される背景にあるのではないだろうか。先の『日本後紀』弘仁6年正月5日条の造瓷器

生に関わる記事はその延長上で理解されるべきものと思われ、山城産緑釉陶器との質感の違いは、単純に従来の鉛釉技術を伝習しただけではなく青磁に近い質感を求めて何らかの工夫が加えられているのではないだろうか。それが附章4で述べられているようにK₂Oの比率差となつて分析結果に現れているのではないか。

ところで、平安京に運ばれた猿投窯産緑釉陶器に関わる史料として『延喜式卷二十三民部省』に尾張・長門の2国に対して国家に納めるべき緑釉陶器の品目・数量・規格を記した条項がある。

年料雑器

尾張国瓷器、大碗五合合中碗五口口小碗小茶碗廿口口蓋五口口中掬子十口口小掬子五口口花盤十口口花形鹽杯十口口瓶十口口

長門国瓷器、大碗五合合中碗十口口小碗十五口口茶碗廿口口花盤卅口口花形鹽杯十口口瓶十口口大四口口小六口口

右両国所進年料雑器、並依前件、其用度皆用正税、

冷然院北内溝資料には長門産は含まれていないので、ここでは尾張に課せられた器物の内容と北内溝資料を中心に平安京およびその近郊からこれまでに出土した初期猿投窯産緑釉陶器との対応関係を器形別に検討する。(図10)

〔大碗〕北内溝資料の中に少なくとも4点が確認できる。年料雑器の規定では数量の単位が大碗についてのみ「合」とあり蓋が伴うと考えられる。蓋については冷然院外にあたるため今回の指定候補からは外したが、大炊御門大路南側溝から対応する口径の蓋が出土している。I期新段階では大碗に該当する口径の緑釉陶器碗の出土例は冷然院以外にほとんどないが、灰釉陶器では右京三条三坊や榎原遺跡で大型の蓋が出土している。

〔中碗〕北内溝からは口縁部や高台片が数点出土しているが、口縁から底部まで残存する資料がないため、図10では右京三条三坊の資料

で代用している。対応する口径の蓋が1点出土しており、中碗以下の蓋は年料雑器中の貢納品目の規定にはないが生産はされていたようである。

〔小碗〕出土点数は多い。他の平安京内の遺跡からの出土事例でもこの大きさの碗が最も多く、陰刻花紋を施した例もかなりある。

〔茶碗〕陸羽の『茶経』に記されている越州窯産の蛇の目高台碗を模した碗が該当する。口径も規定の5寸(約15.0cm)にほぼ一致する。北内溝からは蛇の目高台の底部や特徴的な直線的に外方へ開く口縁部が出土している。

〔蓋〕規定では口径が4寸7分とやや小振りである。北内溝資料では口径的に合致するやや浅めの碗がある。字義(酒杯)からすれば妥当な大きさかもしれない。

〔中・小掬子〕「掬子」がどのような器形を指すのかは必ずしも明らかではなく、耳皿の可能性も考慮したが、「掬」の字義(捧げ持つ)や大きさの規定に「中・小」とあり、おそらく貢納品目には上っていない「大掬子」があるであろうことなどからすれば、大きさに多様性の少ない耳皿より、京内資料を含めればこれより大型品や小型品の出土例のある段皿である可能性が高い。図示した資料は右京三条三坊のものだが、小片が北内溝からも出土している。

〔花盤〕これも対応する器形の特定が困難な器だが、口径の一致と唐代の青磁に花紋を施したほぼ同形の製品(図9)があることなどからこの器形が該当すると推定した。類例は右京三条三坊・榎原遺跡にあり、榎原遺跡では同形の灰釉陶器も出土している。

〔花形塩杯〕径3寸(約9.0cm)とかなり小型品で、「花形」とあるところから輪花あるいは体部を花卉状に変形させたような器形が想定できるが、今のところ出土資料のなかに該当するものは確認できない。

〔瓶〕北内溝からは猿投窯産の瓶類は体部の小片が出土したばかりで、全体の形状のわかる

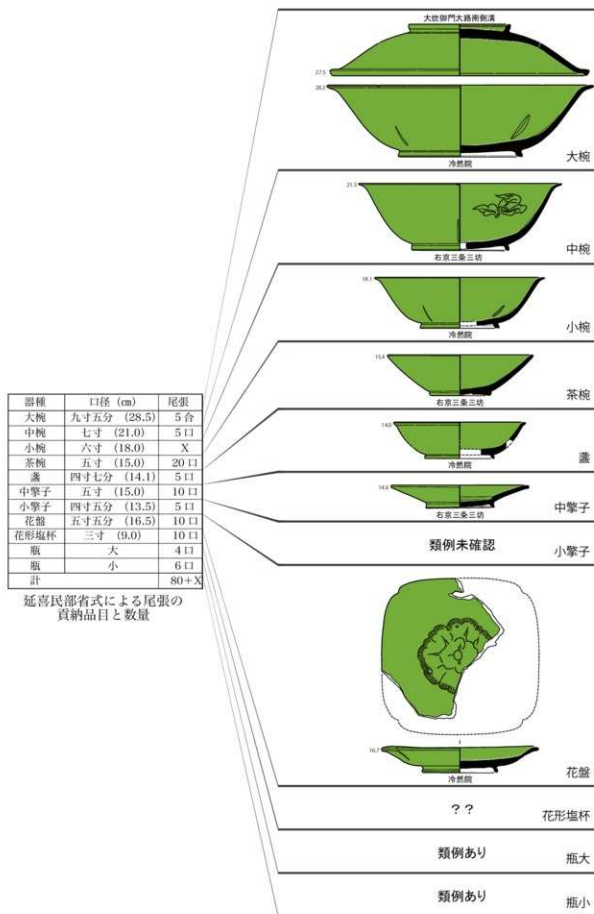


図10. 延喜民部省式に対応する平安時代初期猿投窯産緑釉陶器

ものはないが、京内の出土資料から類推するとおそらく手付き瓶のことかと思われる。それらの出土事例から大小の存在も確認できる。

おわりに

今回の指定候補対象となった遺物群は嵯峨天皇・上皇の離宮・御所であった「冷然院」で使用された器物の実態を具体的に知る資料として重要な意義を持つものといえるだろう。とりわけ猿投遺産の緑軸陶器については、当時の国産施軸陶器の最も優れた製品が多量に冷然院に納められ使用されていたことが明らかになった。

嵯峨天皇およびその周辺と猿投遺産での緑軸陶器生産の関連については尾野善裕氏が詳述しており¹⁹⁾それを参照されたいが、今回、平安京における平安時代前期を象徴する焼き物である緑軸陶器普及の発信源ともいうべき冷然院の土器類の再調査により、改めて出土遺物を通し弘仁・天長期の唐風文化への指向を確認できたことは大きな成果であるといえよう。

[註]

- 1) 平尾政幸「第V章 平安時代前期の土器」『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊、1990。
- 2) 平尾政幸「平安宮左兵衛府跡」『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集、1978-II、1979。
平尾政幸「平安宮左兵衛府・侍従所跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成21年度、2010。
- 3) 平尾政幸「平安宮中務省跡」『平安京跡発掘調査概要』京都市埋蔵文化財研究所概要集、1978。
- 4) 平尾政幸ほか「平安京右京三条三坊」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊、1990。
- 5) 上村和直・吉崎 伸「左京二条二坊(2)」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1984。
吉川義彦「平安京発掘調査報告 左京二条二坊・三町 冷然院・神祇官町・大炊御門大路・

二条城北遺跡」関西文化財調査会、2014。

上村憲章「平安京左京二条二坊二・三町 二条城北遺跡」古代文化調査会、2012。

- 6) 木下保明「史跡名勝嵐山」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所、1988。
- 7) 平尾政幸「緑軸陶器・灰軸陶器・白色土器」『平安京提要』角川書店、1994。
尾野善裕「古代尾張における施軸陶器生産と歴史的背景」『新修名古屋市史 資料編考古2』名古屋市、2014。
- 8) 平尾政幸「平安京右京三条三坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所、1988。
- 9) 「史跡大覚寺御所跡発掘調査報告 大沢池北岸城復元整備事業に伴う調査」旧嵯峨御所大覚寺、1997。
- 10) 前掲註3と同じ。
- 11) 前掲註3と同じ。
- 12) 『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財調査概報、京都市埋蔵文化財研究所、2002。
- 13) 同上
- 14) 平尾政幸・梅川光隆「平安京右京六条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』、1989。
- 15) 前掲註6と同じ
- 16) 平尾政幸・家崎孝治「栗栖野瓦窯跡」『昭和60年度京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局、1986。
- 17) 橋崎彰一ほか「愛知県猿投山山西麓古窯址群」愛知県教育委員会、1956～1959。
齊藤孝生ほか「愛知県猿投山山西麓古窯址群分布調査報告」愛知県教育委員会、1980など。
- 18) 尾野善裕「古代尾張における施軸陶器生産と歴史的背景」『新修名古屋市史 資料編考古2』名古屋市、2014。
- 19) 同上

はじめに

推定冷然院跡内で出土した瓦類には、奈良時代・長岡京期、平安時代前期の瓦ほか、平安時代中期、平安時代後期、鎌倉時代、桃山時代のものがあるが、ここでは、「北築地の内溝」およびその周辺⁸で出土した平安時代前期以前の瓦について報告する。瓦類の出土遺構は、「北築地の内溝」が主体で、他の遺構のものは点数が少ない。また、溝内の出土量も少なく、冷然院北築地又は北側の門などの所用瓦と想定できよう。

本稿では報告の関係上、瓦類の年代を奈良時代・長岡京期・平安時代前期前葉（8世紀末～9世紀初頭）、平安時代前期中葉（9世紀前葉）、平安時代前期後葉（9世紀中葉）に分けて説明する。時期が不明なものも少なくない。

1 指定瓦類の概要

いずれも平城京及び長岡京から再利用を目的として搬入された軒瓦で、全体の中に占める割合が高い。

平城京式は複弁八葉蓮華文軒丸瓦指 335（平6227D）・重圓文軒丸瓦指 337（平6016）・重弧文軒平瓦指 341（平6574）がある。この内、指 337 は長岡京からも出土する。

長岡京式は複弁八葉蓮華文軒丸瓦 332（長7235F）・単弁二十葉蓮華文軒丸瓦 334（長7193Aa）・均整唐草文軒平瓦 349（7722G）・均整唐草文軒平瓦 343 などがある。

平安時代前期前葉（8世紀末～9世紀初頭）

西賀茂瓦窯群跡及び吉志部瓦窯跡（摂津国）で生産された軒瓦である。

唐草文軒平瓦 344 は、西賀茂醍醐ノ森瓦窯跡及び西賀茂角社瓦窯跡出土瓦 NS205 A と同範瓦である¹⁾。唐草文軒平瓦 348 は、西賀茂瓦窯群跡からの出土例はないが、西賀茂角社瓦窯跡出土 NS208B と文様構成が近似していること

から、同窯の生産品である可能性が高い。唐草文軒平瓦 347(ka4) は、吉志部瓦窯跡（摂津国）と同範瓦である²⁾。

西賀茂瓦窯群跡は平安宮の北方（洛北）の西賀茂地域に築かれた造瓦所で、醍醐ノ森瓦窯跡・角社瓦窯跡・鎮守庵瓦窯跡の3支群から成る。主な供給先は平安宮で、後述する吉志部瓦窯跡との間に瓦当範の移動が認められる。

吉志部瓦窯跡は大阪府吹田市に築かれた造瓦所である。淀川の水運を活かせる立地にあり、平安宮・京や近京諸施設へ瓦を供給していた³⁾。

両造瓦所は平安京遷都を契機に設置されたいわゆる官窯である。なかでも、西賀茂瓦窯群跡は平安宮大極殿院などの中樞施設を主な供給先としており、平安京遷都事業の開始とともに操業を始めたと考えられている⁴⁾。一方、吉志部瓦窯跡は淀川水系の再整備や近京諸施設の整備事業が本格化するにあたって開設されたと考えられている。瓦当範にみられる傷の進行状況を確認すると、瓦当範は西賀茂瓦窯群跡から、吉志部瓦窯跡や大山崎瓦窯跡へと移動していることが分かる。このように吉志部瓦窯跡は、西賀茂瓦窯群跡からやや遅れて操業を開始する。ただし、このような瓦当範の移動をもって移動元の生産活動が停止するわけではない。消費地の拡大にともなって需要量が増加し、これに対応するために造瓦所を整備したと考えられる。以上の通り、西賀茂瓦窯群及び吉志部瓦窯跡産軒瓦は 8世紀末～9世紀初頭に位置付けることができる。

平安時代前期中葉（9世紀前葉）

当該期の軒瓦には、芝本瓦窯跡産瓦と産地不明のものがある。

唐草文軒平瓦 345 は芝本瓦窯跡出土軒平瓦と同範瓦である⁵⁾。唐草文軒平瓦 342・346 は、芝本瓦窯跡から出土した軒瓦の中に同範品を確認することが出来ないが、文様構成が近似する

ことから同窯で生産された可能性が高いと考える。芝本瓦窯跡は、深泥池より西山を介した南側の斜面上に位置し（京都市左京区松ヶ崎南池ノ内町ほか）、2基の瓦窯跡があったとされる。昭和17年頃に栗野黙氏によって発見され、坂東善平氏らが瓦片を収集しているが、瓦窯跡は全壊している⁶⁾。同瓦窯産軒瓦が、平城京左京東三坊大路から平城上皇の平城京遷都時期の土器とともに出土している。したがって、遅くとも大同4年(809)～弘仁元年(810)には開窯していたと考えられる。

単弁蓮華文軒丸瓦(331・333・336・340)は文様構成が近似するが、瓦当径の大きさと銘の有無で分けられる⁷⁾。336は瓦当径が大きく「近」銘も認められる。340の瓦当径は大きいですが、銘の有無は不明である。333は瓦当径が小さく銘も認められない。331は333に「近」銘を追刻する。「近」銘関連軒丸瓦は冷然院北側溝だけでなく、邸宅の中心とされる三町城や五町城(二条城域)からも出土しており、冷然院造営時の所用瓦と考えられる。冷然院は、弘仁7年(816)8月24日に嵯峨天行幸が初見であり〔『類聚国史』・『日本紀略』〕、先に挙げた芝本瓦窯跡産軒瓦と近い時期に比定できる。

平安時代前期後葉(9世紀中葉)

当該期の軒瓦には、上ノ庄田瓦窯産瓦と産地不明のものがある。

複弁蓮華文軒丸瓦350(KS203)・338(KS103)は上ノ庄田瓦窯跡から出土した軒丸瓦と同範瓦である⁸⁾。蓮華文軒丸瓦339(KS104に類似)と、唐草紋軒平瓦351(KS203と類似)は上ノ庄田瓦窯跡から出土した軒瓦の中に同範品を確認することが出来ないが、文様構成の近似から同窯で生産された可能性が高い。唐草紋軒平瓦350は産地不明であるが、高陽院から同範瓦が出土している。

上ノ庄田瓦窯跡は、西賀茂地域の北端に築かれた瓦窯跡(造瓦所)である。昭和15年(1940)に木村捷三郎氏らによって発見され、その後の

発掘調査で平窯を確認している。上ノ庄田瓦窯は、主として淳和院と雲林院に供給しており、操業時期は天長年間(824～834)年間に推定できる。

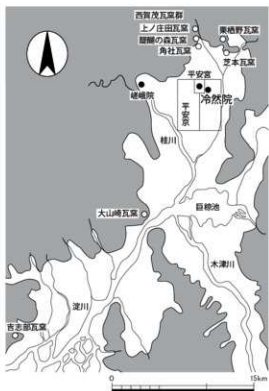


図11. 平安京近郊の瓦窯

2 瓦から見た冷然院の造営

史料によると冷然院内には50棟以上の建物があったとされるが、これまでの出土瓦の点数を見る限り、総瓦葺き建物があった可能性は低い。そのため、冷然院内から出土する多くの瓦は、大棟や築地などに葺かれたと推測できる。指定品は冷然院北築地内溝及び溝周辺から出土したものであることから、築地もしくは北方施設の大棟などに葺かれた瓦であったと考えられる。前期後葉に比定した上ノ庄田瓦窯跡産軒瓦も小型であり築地の薬棟などの補修に使用されたと考えられる。

本報告では瓦の出土状況から、冷然院所用瓦を単弁蓮華文軒丸瓦(331・333・336・340)と芝本瓦窯跡産軒瓦と推測した。ここで問題となるのは、所用瓦に先行する搬入瓦と平安時

代前期初頭～前葉の瓦の位置付けである。冷然院跡から出土する搬入瓦は、指定品以外に平城京式(6133A)・(6225A)・(6664)、長岡京式(7757Aa)・(7721)などがあり、出土点数の割合も高い。搬入瓦は平安時代前期初頭の瓦と併用して使用されていることが多く、天皇の御在所である内裏では、搬入瓦と西賀茂瓦窯跡産軒瓦・吉志部瓦窯跡産軒瓦がまとも出土しており、搬入瓦を利用することによって、完成を急がせたと考えられている⁹⁾。このような事例は、西鴻臚館跡(右京七条一坊三・四町)でも同様で、遷都に際して予測された渤海使の入京に備えるための「客館」とするために完成を急いでいる。一方、大極殿院・太政官・中務省・民部省などの実務的官司及び平安京内の官舎施設(神泉苑など)・大規模邸宅(西三条邸など)からも搬入瓦と平安時代前期初頭の瓦がまとも出土する¹⁰⁾が、これらの施設では、搬入瓦の使用事実をもって、造営が急がれていた場所と解釈ができないとする¹¹⁾。紙面の関係上詳細な論考は避けるが、実務官司だからこそ、新調瓦にこだわらず搬入瓦を多く利用したと推測している。このような宮内での利用状況は、京内においても同様であった可能性が高く、冷然院から出土する搬入瓦の評価については慎重に検討しなければならない。また、西賀茂瓦窯跡群や吉志部瓦窯跡は前期前葉～中葉まで操業を継続しており、瓦の出土状況の成果をもって前身施設があったと断定することは出来ない。

そこで本稿では、以下の2通りの供給体制を想定しておきたい。

①冷然院が造営された平安京左京二条二坊三～六町では、平安京遷都直後から土地利用が行われ、前都からの搬入瓦と西賀茂瓦窯跡群や吉志部瓦窯跡から平安時代前期初頭の瓦が供給された。その後、冷然院の造営が開始されると、芝本瓦窯跡産や単弁八葉蓮華文軒瓦が新たに供給され、冷然院が完成する。その後、築地などの補修のために上ノ庄田瓦窯跡から小型瓦が供

給されたと推測できる。

この場合、同町は上述した内裏や西鴻臚館のように、平安京遷都後直ぐに利用すべき場所として位置付けられていたことが分かる。さらに、冷然院の造営になると、芝本瓦窯跡産軒瓦や「近」銘関連瓦などが供給され、これまでの供給体制に変化が認められる。

②冷然院造営時に平安時代前期中葉の瓦と共に、搬入瓦・西賀茂瓦窯跡群や吉志部瓦窯跡からも供給されたとする。その後、築地などの補修のために上ノ庄田瓦窯跡から小型瓦が供給されたと推測できる。

この場合、搬入瓦が冷然院の造営のためにストックされていたこととなる。しかし、冷然院は遷都後から10年以上経ち造営を開始していることから、瓦がストックされていたとは考えにくい。そこで留意したいのが、嵯峨天皇による平安宮内の修理事業である。桓武天皇が推し進めた遷都事業は徳政の争論(造宮職の解体)をもって一応の終了を迎えるが、突貫工事であったのか、嵯峨天皇の時には宮内の諸施設を修理する。この時の修理は大規模であったようで、主要施設の瓦が全て新調瓦へ葺き替えられた可能性がある。この時に葺きおろされた瓦が、再利用を目的に平安宮に近接している冷然院へと運び込まれたと想定できる。冷然院の所用瓦と推定した「近」銘瓦や芝本瓦窯跡産軒瓦は、平安京内からの出土が目立ち、西賀茂瓦窯跡群とはやや様相が異なる。このように、政治の中心である平安宮内への供給体制と離宮関連の供給する体制が異なっていたと考えられる。このようなことから、西賀茂瓦窯跡群産や吉志部瓦窯跡産軒瓦は、宮内からの搬入の可能性が高いと言える。上ノ庄田瓦窯産の位置付けについては先述のとおりである。

おわりに

以上のとおり、現状の史資料から考えられる冷然院の成立過程を示した。冷然院をはじめと

する平安宮の大規模邸宅の成立過程は、平安京遷都事業と綿密に関連しており平安京の造営を検討する上で欠かせない資料である。今後はさらに調査成果を積み上げ、残された課題を明らかにする必要がある。

※ 本件の瓦を選定するにあたっては築地に使用されていた可能性を考慮して溝周辺出土の瓦も少数含めた。

[註]

1) 財団法人古代学協会編『西賀茂瓦窯跡』『平安京跡研究調査報告第4輯』、1978。

2) 大阪府教育委員会編『岸部瓦窯跡発掘調査概報一吹田市小路一』、1967。

3) 前掲註2と同じ。

4) 古閑正浩「廃都後における長岡京地の再編と瓦一中福知遺跡の再評価をめぐって」『古代文化』56-8、2004。

5) (財)京都市埋蔵文化財研究所編『坂東善平収蔵品目録』、1980。

6) (財)京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎収蔵瓦図録』、1996。

7) 大型で「近」銘のあるものは、冷然院以外に平安京左京北辺四坊、北野廃寺、広隆寺、深草寺、法禅寺で出土している。大型で銘の有無が不明のものは、平安京右京二条三坊十五町、右京六条一坊五町、左京二条二坊九町(高陽院)、左京三条三坊十二町三条西殿、左京三条四坊四町東洞院大路、室町殿、京大構内遺跡、北野廃寺、嵐山遺跡、如意寺・室町殿で出土した。

小型で銘が無いものは、右京三条一坊六・七町(西三条第)、左京三条四坊十町、東寺境内で出土した。小型で「近」銘を追刻したものは、右京三条一坊六・七町(西三条第)、右京六条一坊五町で出土した。小型で銘の有無が不明のものは、右京三条一坊六・七町西三条第、右京六条一坊五町、左京三条三坊十一町、左京四条一坊六町、左京六条二坊六町、北野廃寺で出土した。

8) 南孝雄「上ノ庄田瓦窯跡」『平成12年度京都市埋蔵文化財調査概要』、2003。

9) 植山茂「平安宮所用瓦の様相」『古代学論叢』、1983年。

10) 搬入瓦は平安京内では官宮施設があったとされる左京三条一・二坊(神泉苑)、右京三条一坊三町(右京職付近)、右京四条一坊四町(朱雀院)、右京七条一坊三・四町(西鶴廬館)、右京八条二坊八町(西市外町)、と、離宮があったとされる右京三条一坊六・七町(西三条第)、右京三条二坊一六町(斎宮)、右京三条三坊五町、右京四条一坊四町、右京四条二坊十三町(淳和院)、右京六条一坊五町、右京六条二坊二町、左京二条二坊九・十町(高陽院)、左京三条三坊十一町から出土する。

11) 網仲也『平安京造営と古代律令国家』塙書房、2011。

1 概要

内面は、現状で6行32文字ほど。ただし、土器の周縁部に破損箇所があるため、32文字以上となる可能性も残されている。書かれている墨書は、一字一音の仮名である。字体は、真名(漢字の字体)を保っているものから、現在で言う平仮名に近いものまで混在しており、草体化の度合いはさまざまである¹⁾。

土器に書かれた32字の文字数は、五七五七七の一般的な和歌に用いられる数に近いが、歌句としてのつながりはない。そして、散文にもなりそうにない。しかしながら、部分的には、和歌で使用される単語を確認できたことから、和歌に関係するものと考えて差し支えない。

外面の墨痕は、中央部に薄い部分が多く、行取りができなかったため、積文として立てなかった。残りのよい口縁部に近いところは、いくつかの文字を釈読した。

釈読できた文字は、「かもと」「ふづの」「る」である。「かもと」の「かも」は、和歌の中で多くの事例がある。このことから、外面も和歌の一部を記した可能性が高いとみられる。

このように、本墨書土器に、和歌で用いられる語の一部が書かれていることと、宴席の後に廃棄されたという出土状況のあり方を合わせ

て考えると、冷然院で催された宴席において和歌が詠まれたということを示している。しかも、歌を持ち寄ったのではなく、その場で創作し、披露されたものと考えられる。

また、字体に着目すれば、本墨書土器の年代観が9世紀前半であることは、現在で言う平仮名に近い仮名文字が書かれ始めたときとされていた9世紀後半を遡る事例であり、仮名の字体についての研究史にも一石を投じるものとなる。

2 釈読について

(内面) <1行目>

な…字母は「奈」。「奈」の下半部左側のみ見える。草体化の度合いは低い。

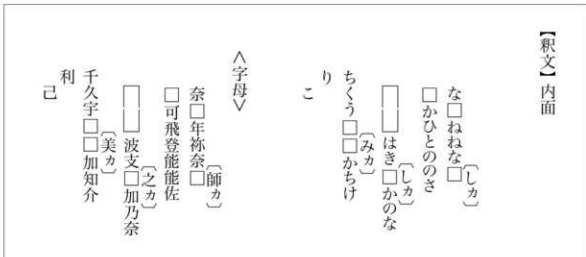
□…土器片2片にわたる。わずかな墨痕が2箇所見られ、他のバランスから考えて1文字とした。

ね…字母は「年」。

ね…字母は「祢」。土器片3片にわたる。上の「ね」より大きいのが、1文字目の「な」の文字幅を考慮すると、バランスはとれている。下の「な」も、ほぼ同じ大きさ。

な…字母は「奈」。土器片2片にわたる。左上部分はやや薄いのが1画目から確認できる。

し…字母は「師」。左上部分を書き出して、下まで降りてから上にはらう。欠損してい



る部分にもう一段縦画が入っていることも考えられる。左半分は、角度からみると、にんべんやさんずいにはならない。

〈2行目〉

□…「耳」などの字母が想定できるが、左下の墨痕が説明できず、釈読不明とした。

か…字母は「可」。1行目の「奈」と同じく、草体化の度合いは低い。

ひ…字母は「飛」。土器片3片にわたる。1画目は、上字の「か(可)」の最終画に重なる。

と…字母は「登」。土器片3片にわたる。はつかしらは左右2片に、「豆」は下の1片に書かれている。上の「か」「ひ」に比べて大きい、これより下の文字は相対的に大きくなっている。

の…字母は「能」。横長の字体で、文字の最後は、右行の「ね」「な」と一部接する。

の…字母は「能」。上の「の」とくずし方がやや異なる。

き…字母は「佐」。土器片3片にわたる。草体化の度合いは低い。

〈3行目〉

□□…左行と重なる部分があるため判別し難いが、土器片2片にわたって3文字分前後の文字と推定される。中央あたりに「へ」らしき文字が見えるが、上下の墨痕との関係が不明瞭なので、釈読不明とした。

は…字母は「波」。現在で言う平仮名に近い。

き…字母は「支」。土器片2片にわたる。文字の下半のみやや草体化。

し…字母は「之」。やや小さめに表記。

か…字母は「加」。土器片2片にわたる。現在で言う平仮名に近い。

の…字母は「乃」。右行の「の(能)」に重なる横長の字体。現在で言う平仮名に近い。

な…字母は「奈」。草体化の度合いは低い。

〈4行目〉

ち…字母は「千」。

く…字母は「久」。土器片2片にわたる。

う…字母は「字」。土器片2片にわたる。

「乎」の可能性も考えたが、1画目が左上から右下へしっかりと書かれている点から「う」とした。

□…文字の下端の墨痕がわずかに認められるが、土器の欠損部にあたるため、釈読不能。

み…字母は「美」。土器片2片にわたる。左下は欠損しているが、右側への最終画は確認できる。

か…字母は「加」。土器片2片にわたる。やや横長の字体。

ち…字母は「知」。土器片2片にわたる。現在で言う平仮名に近い。

け…字母は「介」。一見「乃」のようであるが、全3画で書いており、2画目は右端で内側にはらい、3画目はそれより上から始まる。なお、下に墨付きが見られるが、文字とは異なると判断し、釈文に加えなかった。

〈5行目〉

り…字母は「利」。左半に比べて、右半のりっとうは真っ直ぐしっかりと書かれており、草体化の度合いは低い。

〈6行目〉

こ…字母は「己」。1画で書いている。

(外面)

か…字母は「可」。内面の2行目と同様に、草体化の度合いは低い。右にも1文字あり。

も…字母は「毛」。現在で言う平仮名に近い。

と… 字母は「度」。土器片3片にわたる。やや大きい、一つの文字として問題ない。
ふ… 字母は「不」。現在で言う平仮名に近い。右の「か」と同じ大きさで書かれている。
ぎ… 字母は「経」。周りの文字と上下逆転している。草体化の度合いは低い。
の… 字母は「能」。右の「と（度）」とほぼ同じ大きさ。
る… 字母は「留」。上の6字に対面する口縁付近に位置する。現在で言う平仮名に近い。

そのほか、土器の中央付近に、同じ筆画が集中する部分がある。習書なのか筆慣らしなのか判別はつかないが、「ひ（比）」のような字、あるいはその一部分を何度も書いている。

3 想定される歌句

本墨書土器は9世紀前半のもので、和歌史で言えば、『万葉集』から『古今和歌集』までの中間で、『万葉集』からの影響を受けつつ、一方で後の『古今和歌集』に影響を与える時期にあたる。そのため、当該期は平安時代に入っているけれども、類例としては『万葉集』の時代も含めて、想定される歌句の表現をあげていく。

内面1行目の「な□ね」は、まず鳥類や鹿の「鳴く音」が想定できる。「雁の鳴く音」（『万葉集』²¹）巻第10・2137番歌）、「郭公なく音」（『古今和歌集』²²）巻第12・579番歌）、「鹿のなく音」（『古今和歌集』巻第4・214番歌）などがあり、類例は多い。ほかに、「寝」に願望を表す助詞「ね」と尊敬の「さ」を添える「入り来て寝さね」（『万葉集』巻第14・3467番歌）、動詞「成る」に否定の助動詞「ず」を伴う「実は成らねども」（『万葉集』巻第10・1860番歌）、「な…そ」の形をとる「なはねそ」（『万葉集』巻第2・153番歌）、「な寝ねそ」（『万葉集』巻第13・3289番歌）など多様な用例がある。

「ねなし」は、拠り所のない喩えとして詠ま

れる「根無し草」という語がある。『千載和歌集』²³に「あす知らぬみむろの岸の根無し草なにあだし世にをひはじめけん」（巻第17・1131番歌）とあり、また、それを遡る10世紀代に成立したと考えられている『古今和歌六帖』にも「根無し草」がみえる。

2行目の「かひとの」は、疑問の助詞「か」を伴う「秋の田の穂田の刈りばかか寄り合はばそこもか人の我を言成さむ」（『万葉集』巻第4・512番歌）や、「よそにふる雨とこそ聞けおぼつかな何をか人のこひ地と言ふらん」（『後撰和歌集』²⁴）巻第9・568番歌）などがある。

「のさ」は、上の「ひとの」とつながれば、「己妻を人の里に置きおほほしく見つそ来ぬるこの道の間」（『万葉集』巻第14・3571番歌）や「忘れにし人のさらにも恋しきかむげにこじとは思ものから」（『拾遺和歌集』²⁵）巻第7・365番歌）、また「のさ」と区切れば、『万葉集』には「角の里」（巻第2・138番歌）の一例しかないが、平安期以降では、「よしのの里」（『古今和歌集』巻6・332番歌）や「いくのの里」（『玄々集』154番歌）など、最後が「の」で終わる地名＋「の」＋「里」の形が多い。

3行目の「はき」は、「萩」であろう。『万葉集』では、「秋萩」をはじめ、秋の歌の中に多数見られる。続く「しかのな」は、「しか」は「鹿」と想定でき、鹿を原文で「加之」と書く事例も『万葉集』にある（巻第20・4320番歌）。「しか」を「鹿」としたうえで考えられるのは、「山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつつ」（『古今和歌集』巻第4・214番歌）や「秋萩にうらびれをればあしひきの山下とよみ鹿の鳴くらむ」（『古今和歌集』巻第4・216番歌）などの表現であろう。前者は1行目の「鳴く音」も重なっており、後者は同行の「萩」が詠まれている。これらは、秋の歌としてよく用いられている。

4～5行目の「ちくう□みかちけり」は、区切りが確しい。「ちく」は、「ちくさ」が多数詠

まれているが、下とのつながりからみて、「ちく」で終わる歌句の方が相応しく、『万葉集』に「秋山の黄葉をかざし我が居れば浦潮満ち来いまだ飽かなくに」(『万葉集』巻第15・3707番歌)などがみえる。

「う□みかち」は、「うらみかち」というフレーズを想定でき、『斎宮女御集』に「あまのすむさとをたづねてこしからにうらみかちなるなこそたちぬれ」(247番歌)と詠まれている。「うらみ」について、ここでは「浦廻」と「恨み」をかけているが、『万葉集』では「浦廻」が多数派で、平安期以降に「恨み」が増える傾向にある。「浦廻」は、羈旅歌や叙景歌として詠まれることが多く、寄せる波や草花・貝・鴨などを通して、寂しさや恋心を表現するさいの舞台となっていることもあり、鹿や鹿の鳴く声が詠まれていることも重なり合う。続く「けり」は、助動詞と思われるが、上は連用形ではなく、直接つながらない。

6行目の「こ(己)」は、これのみ独立しており、文字体を呈しているものの、5行目の下端にある墨付きと同じように、筆慣らしとして書いた可能性も考えられる。

外面については、口縁部付近に「かもと」がみえる。「百重にもき来しかぬかもと思へかも君が使ひの見れどあ飽かざらむ」(『万葉集』巻第4・499番歌)のように、助詞「か」(疑問) + 「も」(詠嘆) + 「と」で、前に打消を伴って願望を表すものや、「思ひつつぬ寝ればかもとなぬばたまの一夜も落ちず夢にし見ゆる」(『万葉集』巻第15・3738番歌)のように、疑問の「か」に副詞「もとな」と続く形がある。また、「かも」を「鴨」とし、「沖つとり鳥鴨とふ船の帰り来ば也良の防人早く告げこそ」(『万葉集』巻第16・3866番歌)のように、後ろに語が続くことも考えられる。

「かも」のみでみると、詠嘆の終助詞として、「青旗の木幡の上を通ふとは目には見れども直に逢はぬかも」(『万葉集』巻第2・148番歌)

や、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」(『古今和歌集』巻第9・406番歌)など類例は多い。

ところで、「かも」は、文字の大きさから左行の「ふ」に続く可能性も考えられる。「かもふ」であれば、疑問の「か」と詠嘆の「も」の後ろに動詞を伴う「妹が家に雪かも降ると見るまでにこども粉ふ梅の花かも」(『万葉集』巻第5・844番歌)や、動詞「もふ」で区切った「子持山若かへるてものみつまで寝もと我は思ふ汝はあどか思ふ」(『万葉集』巻第14・3494番歌)もある。

「かもと」の左の「ふゞ」は、「ふふ」で区切れば、「春雨を待つとにしあらしわ我がやどの若木の梅もいまだ含めり」(『万葉集』巻第4・792番歌)や、「雪つもる峰にふきやわたらん越のみそらにまよふしら雲」(『千載和歌集』巻第6・455番歌)など用例はあるが、2文字目が転倒しているので、一連の単語になるかどうかはわからない。

そのほか外面において、「る」や中央付近にみえる「ひ」の繰り返しを確認できる。「ひ」を繰り返す用例が和歌にないことはないが、連続する単語として捉えるには難がある。習書とみるべきであろう。

全体として、4～5行目の「けり」を除けば、行をまたぐような歌句がみられないことが一つの特徴としてあげられる。このことは、一連の歌を書きつけたのではなく、歌をつくるために、推敲しながら歌のフレーズを不規則に書き連ねたものであることを推測させる。

とりわけ外面をみれば、方向の異なる文字が散見でき、歌のフレーズとおぼしきものから同じ文字の習書まであり、いろいろと推敲を重ねている様子が読み取れる。できあがった歌は、おそらく紙ベースのものに書いたのであろう。

推測される歌の内容は、1行目「鳴く音」と3行目「鹿」、そして同行の「萩」から考え合

わせると、おそらく推敲していたのは秋の歌で、さらに4行目の「うらみがち」も含めると、寂しきや孤独を表出した恋歌ではないかと思われる。

ところで、書かれた文字のなかで「な(奈)」を再三書いている点は、注意を要する。これまでの出土木簡や墨書土器の状況を見る限り、「奈」とあるだけで、難波津の歌の可能性が高いと考えられてきた。しかし、本墨書土器には、「な(奈)」は多いが、難波津の歌のフレーズは一つもない。

今回の事例だけで出土文字資料全体の傾向を論ずることはできないが、「な(奈)」の文字について、かりに特殊であるならば、どのような意味があるのか、または偶然使用頻度が高かっただけなのかなど、この土器をきっかけに、今後つきつめて考えていく必要があると思われる。いずれにせよ、現在で言う平仮名に近い仮名文字の成立時期も含めて、本墨書土器が各学界に与える影響は大きく、今後活発な議論が期待される。

4 その他の墨書土器

上記の仮名の墨書土器以外に、2点出土している。①土師器皿45の外部底面に「西」、②須恵器杯B蓋185の外部に、つまみを挟んで「□鏡」と書かれたものである。

「鏡」と言えば、正倉院に伝来する佐波理の鏡などが有名で、正倉院文書にも「白銅飯鏡」や「銀鏡」などが散見することもあり、金属製のイメージが強い。そのため、須恵器であるにもかかわらず、かねへの「鏡」と書かれていることに、違和感をおぼえるかもしれない。

しかし、正倉院文書を見ると、宝亀年間の食口案などに、土壺や土盤をはじめとする土製の物品名が並ぶなかで「土鏡形」という表現があり、これは碗形の土師器を指すものと考えられる。したがって、「鏡」と書かれているからといって、必ずしも金属製品を指すとは限らず、

ここで墨書された「鏡」は、器形をあらわしている可能性がある。

考古学用語とは異なるが、「□鏡」と墨書した人は、須恵器杯Bを「□鏡」と呼称していたのかもしれない。なお、蓋の内側にも墨痕があり、碗に転用された形跡がうかがえる。

[付記]

本文作成にあたり、下記の方々からご教示を得た。記して感謝を申し上げる。

阿尾あすか 桑原祐子 土橋誠 西山良平 吉野秋二(五十音順、敬称略)

[註]

- 1) ここでは草仮名という用語は使わない。なぜなら、現在普及している草仮名の概念は、平安期の史料用語とは異なり、また研究分野によっても、捉えられ方がまちまちで、誤解を招く恐れがあるからである。平仮名も含めた用語の整理は、山田健三「草仮名」名義考(『国語語彙史の研究』32、和泉書院、2013年)に詳しい。
- 2) 『万葉集』の訓読は、小島憲之ほか校注・訳『万葉集』新編日本古典文学全集(小学館)を用いた。
- 3) 『古今和歌集』の訓読は、小沢正夫・松田成徳校注・訳『古今和歌集』(新編日本古典文学全集11、小学館、1994年)を用いた。
- 4) 『千載和歌集』の訓読は、片野達郎・松野陽一校注『千載和歌集』(新日本古典文学大系10、岩波書店、1993年)を用いた。
- 5) 片桐洋一校注『後撰和歌集』新日本古典文学大系6 岩波書店、1990年。
- 6) 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』新日本古典文学大系7、岩波書店、1990年。
- 7) 平安文学輪読会編『斎宮女御集注釈』塙書房、1981年。

平安京跡をはじめとして、日本の9世紀代の遺跡から出土する緑釉陶器の産地としては、山城(洛北・洛西)・尾張・長門の3地域が知られている。これら三地域の緑釉陶器には、比較的明瞭な形質的差異が認められるため、肉眼観察だけでもかなりの精度で産地推定が可能である。その際に、尾張産と山城・長門産を識別する有力な指標の一つが釉葉のガラス質化で、同一遺構からの出土であっても、山城・長門産と較べると概して尾張産緑釉陶器の釉葉はガラス質化が著しい。

こうした一般的傾向が発現する背景には、何らかの生産技術上の相違があると見られ、その解明に向けて京都市文化財保護課・(公財)京都市埋蔵文化財研究所より奈良文化財研究所に自然科学的分析についての協力依頼があった。そこで、3者間で連携研究協定を取り交わし、平成27年度事業としては京都市指定文化財候補の冷然院跡出土緑釉陶器を対象に、釉葉部分の非破壊分析を行うこととした。今回分析の対象とした緑釉陶器は、冷然院跡の築地内溝(SD401・SD38)からの出土品で、長門産は含まれていないものの、尾張(猿投窯)産と山城(洛北幡枝)産からなる9世紀前半の一括資料である。

1 分析資料

分析資料は、考古学的な観察から猿投窯産と想定された資料20点、洛北幡枝産と想定された資料20点である。蛍光X線分析は、表面観察から風化の影響の少ないと考えられる部分を測定した。非破壊分析のため、表面風化層を含んだ測定となり風化の影響による組成の変動はあると考えている。

使用した装置は、エグックス製蛍光X線分析装置EAGLE III、測定条件は管電圧20kV、管

電流200 μ A、X線照射径50 μ m、測定時間300秒、真空雰囲気中である。定量分析の標準試料には、NIST(National Institute of Standards and Technology)発行の89、620、1412、BAS(Bureau of Analysed Samples Ltd.)発行のSGT-7、8、コーニングガラス博物館標準試料CMG-A、B、C、および産業技術総合研究所地質調査総合センター岩石標準試料JB-1a、JGB-2を用い、検出元素の各酸化物の合計が100wt%になるよう規格化しFP(ファンダメンタル・パラメーター)法により定量値を求めた。分析値は一資料につき三箇所を測定して平均値をとっている。

測定結果を表11に示す。すべて鉛釉であり、緑着色料として銅を含有し、銅含有量が多い部分(緑彩部)では、亜鉛を検出する資料と検出しない資料の二種類が存在していた。図12から、風化の著しい資料を除くと、猿投窯産資料は酸化カリウム含有量(K_2O)が多く酸化マグネシウム含有量(MgO)が少ない範囲に、洛北幡枝産資料はMgOが多く、 K_2O が少ない範囲に分布する資料が多い傾向を示すことがわかった。図13は前述の2元素と酸化アルミニウム含有量(Al_2O_3)を加えた三角ダイアグラムである。 Al_2O_3 にも違いがみられるが、産地には因らずどちらの産地資料にもみられる。また洛北幡枝産資料では検出したヒ素含有量が多いという傾向がみられた。

2 まとめ

釉葉に対する埋没環境の影響も考慮する必要があるため、単一遺構からの出土品だけで結論付けることは憚られるが、今回の分析結果からは、猿投窯産緑釉陶器に認められる釉葉のガラス質化傾向を、 K_2O 含有量の多さに求めることができそうにも思われる。 K_2O の対酸化ナトリ

ウム (NaO) 比率が高い緑釉陶器の存在については、既に山崎一雄氏の指摘 (山崎 1974) があり、釉薬原料への人為的な植物灰添加が想定されている。今回の分析では、対 MgO 比率ほど明瞭ではないものの、概して猿投窯産で K₂O の対 NaO 比率が高くなっており、猿投窯が日本における灰軸陶器生産発祥の地であることとの関係にも興味もたれるところである。しかしながら、山崎氏による古代の灰軸陶器の分析結果 (山崎 1979) からも窺われるように、植物灰を用いた灰軸では酸化カルシウム (CaO) 含有量が多いことが一般的であるにもかかわらず、今回の分析結果からは必ずしも猿投窯産に CaO 含有量が多いという傾向は認められなかった。また、尾張 (尾北窯) 産の灰軸陶器からは検出され、植物灰を原料としたことの根拠とされている磷酸 (山崎 1979) も、今回の分析では検出限界以下であった。したがって、尾

張産の K₂O 含有量の多さについては、人為的な植物灰の添加によるかもしれないことを考慮しつつも、カリ長石 (砂婆) など他の添加物に起因する可能性を含めて、なお慎重に検討する必要があるだろう。とりわけ、埋没環境による風化の影響の問題を解決するためには、同時期のものと考えられる別遺跡・別遺構の一括資料を同様に分析することが有効と考えられる。

◆参考文献

- 山崎一雄 1974 「奈良・平安時代の緑釉陶器の成分について」『日本の三彩と緑釉』五島美術館
 山崎一雄 1979 「古代釉薬の科学的考察」『世界陶磁全集 2 日本古代』小学館

表11. 蛍光X線分析結果 (wt%)

検定産地	遺構	資料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	CuO	SiO ₂	PbO	Zn	As
SD401		No.1	0.46	0.69	7.5	1.2	0.32	0.41	1.1	0.06	40.3	47.7	nd	*
		No.2	0.48	0.57	8.6	0.66	0.14	0.25	0.85	0.15	53.3	34.9	nd	nd
		No.3	0.49	1.1	6.9	0.89	0.32	0.20	0.48	0.21	51.9	37.4	nd	**
		No.4	0.50	0.58	7.5	0.62	0.15	0.28	0.34	0.12	48.0	40.3	nd	nd
		No.5	0.29	0.74	5.8	1.0	0.28	0.21	0.48	0.10	54.3	36.8	nd	v
		No.6	0.33	1.6	7.8	0.75	0.11	0.29	1.1	0.09	50.2	36.5	nd	***
		No.7	0.47	1.3	7.3	0.70	0.38	0.32	0.56	0.11	58.5	30.4	nd	**
		No.8	0.38	0.84	6.3	0.92	0.30	0.20	0.95	0.14	52.8	37.2	nd	*
		No.9	0.44	0.39	8.5	1.0	0.13	0.18	0.48	0.11	57.6	31.2	nd	nd
		No.10	0.50	0.51	6.6	0.76	0.38	0.28	0.84	0.12	47.2	42.8	nd	*
猿投		No.11	0.54	0.42	8.5	1.5	0.49	0.18	0.48	0.11	57.0	31.0	nd	nd
		No.12	0.36	0.32	7.7	1.0	0.39	0.60	0.14	47.9	41.4	nd	nd	
		No.13	0.42	1.2	6.1	0.90	0.43	0.30	0.56	0.10	50.0	40.1	nd	**
		No.14	0.41	0.33	5.9	0.44	0.97	0.21	0.64	0.31	42.0	48.8	nd	nd
SD38		No.15D	0.57	0.28	5.9	0.62	0.36	0.24	0.74	1.4	35.8	54.1	nd	nd
		No.16	0.82	0.63	10.1	1.5	0.13	0.35	0.86	0.14	48.4	37.1	nd	**
		No.17	0.38	0.45	4.7	0.38	0.08	0.24	0.51	0.17	34.8	58.4	nd	*
		No.18	0.27	1.9	5.2	1.0	0.33	0.15	0.34	0.19	50.6	40.0	nd	***
		No.19	0.54	0.33	5.4	0.41	0.59	0.21	0.59	0.30	36.9	55.1	nd	nd
		No.20	0.51	0.32	6.9	0.91	0.33	0.28	0.89	0.26	38.3	51.5	nd	nd
SD401		No.21	0.56	1.3	9.3	0.25	0.14	0.24	0.85	0.37	58.2	28.0	nd	**
		No.22	0.52	2.1	9.2	0.24	0.10	0.29	0.55	0.17	59.5	27.3	nd	***
		No.23	0.60	0.91	10.1	0.30	0.12	0.30	0.70	0.13	60.9	17.0	nd	nd
		No.24	0.46	1.4	5.1	0.34	0.17	0.29	0.78	0.75	31.9	58.8	nd	***
		No.25	0.7	1.5	7.2	0.43	0.26	0.39	1.2	0.58	37.1	50.6	nd	***
		No.26	0.38	1.0	4.3	0.28	0.20	0.30	0.66	0.68	30.0	62.2	nd	**
		No.27	0.44	0.53	6.3	0.36	0.14	0.37	0.81	0.15	41.4	49.5	nd	nd
		No.28	0.43	0.40	4.7	0.32	0.19	0.27	0.77	0.72	34.3	57.9	nd	nd
		No.29	0.31	1.6	7.9	0.71	0.46	0.57	1.4	1.2	38.1	47.8	nd	***
		No.30	0.47	0.51	8.9	0.68	0.20	0.56	0.38	0.26	35.5	53.1	nd	***
榑枝		No.31	0.56	1.7	8.5	1.02	0.35	0.40	1.0	1.9	37.4	49.3	nd	***
		No.32	0.54	1.0	8.7	1.0	0.43	0.33	1.1	1.1	34.9	51.0	nd	**
		No.33	0.38	1.2	5.9	0.24	0.40	0.34	0.91	0.30	27.7	62.6	nd	**
		No.34	0.60	0.33	5.4	0.26	0.30	0.31	1.1	1.1	34.4	56.5	nd	nd
		No.35	0.44	0.54	6.9	0.52	0.15	0.64	0.94	0.16	44.7	45.0	nd	nd
		No.36	0.56	1.0	7.6	0.63	0.27	0.37	1.2	0.85	45.4	42.4	nd	nd
		No.37	0.57	1.1	4.8	0.46	0.28	0.29	0.67	0.52	31.2	60.1	nd	**
		No.38	0.49	0.58	6.4	0.26	0.18	0.23	0.75	0.33	43.7	47.1	nd	nd
		No.39	0.54	1.3	5.1	0.52	0.53	0.38	0.81	2.5	32.4	54.9	nd	**
		No.40	0.39	0.44	5.5	0.23	0.38	0.35	0.70	0.11	35.2	56.7	nd	nd
榑枝	SD401	No.210	1.1	1.6	8.1	0.24	0.76	0.22	0.89	2.2	55.1	25.6	**	***
榑枝	SD401	No.220	1.1	3.4	9.7	0.30	0.82	0.23	0.65	4.1	49.9	29.8	*	***
榑枝	SD401	No.230	1.2	1.1	10.7	0.31	0.20	0.30	0.70	2.9	57.5	25.1	*	nd
榑枝	SD38	No.380	0.95	0.48	6.3	0.56	0.18	0.29	0.82	2.4	38.2	50.3	nd	*
榑枝	SD38	No.380	0.71	0.78	7.4	0.75	0.40	0.21	1.1	1.6	38.5	48.6	nd	*

(下欄5項目は検定部分の分析結果)

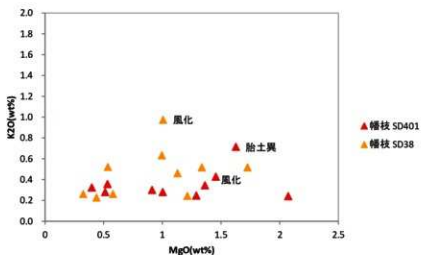
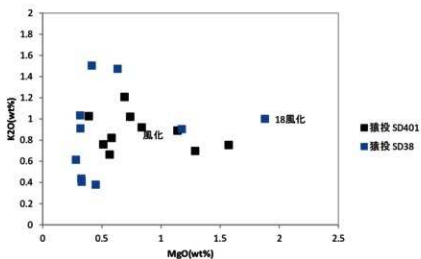


図12. 推定産地別の化学組成の特徴（酸化マグネシウムと酸化カリウム）

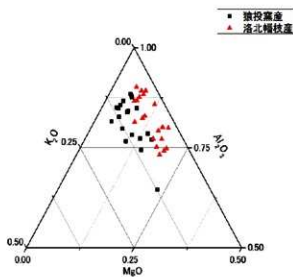


図13. 三角ダイアグラム

平成 27 年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書
平安京左京二条二坊「冷然（泉）院」出土品

発行日 2016年2月8日

発行 京都市文化市民局

住所 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488

編集 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 Tel 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

